

## 京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（3-1）

## — 櫛描文・劃花文青磁の型式変化 —

赤松 佳奈

## はじめに

櫛描文・劃花文青磁といえは13世紀前半の器だと思っていたが、出土事例を精査したところ、特に皿類は13世紀末まで一定量出土することがわかった。13世紀から14世紀前半までの青磁は龍泉窯系青磁を軸にして連続的に出土するため、本来ならば通して整理すべきであるが、櫛描文・劃花文青磁に関する細々とした問題点と、蓮弁文青磁を加えた全体像を一度に説明することは困難だと考えて本稿を（3-1）とし、本稿では櫛描文・劃花文青磁について考える。

副題は、13世紀中葉の土師器に伴って出土した所謂「同安窯」系青磁皿に粗雑化方向の型式変化を確認したことによる<sup>1)</sup>。

この現象を軸に、筆者の持つ冒頭の思い込みを捨てて共伴資料を集めて調べた成果が本稿である。

### 1. 12世紀第4四半期から 13世紀前半の中国産陶磁器の様相

11世紀後半から12世紀代の遺跡から多量に出土する白磁椀・皿類に替わって、青磁椀・皿類が目立った存在となるのは13世紀の初頭である。ただしこの様相を精査すると、西暦約1170～1200年の年代観

をあてた6A段階の土師器皿<sup>2)</sup>に伴って、所謂「同安窯」系青磁や劃花文をもつ「龍泉窯」系青磁が出土する事例が散見されることから、少なくとも12世紀第4四半期には青磁は一定量輸入されており、なおかつ廃棄される状況にあったと考えられる。

11・12世紀代に多量に輸入された白磁椀・皿類に替わって、13世紀初頭には青磁の椀・皿類が盛行する印象がある。この強く印象に残る櫛描文・劃花文青磁については、劇的に白磁にとって替わる印象があるが、13世紀初頭の実体としては、遺構に

中国時代区分	時代区分	土師器の段階区分と略年代
宋	平安時代	4 A 1020
		B 1050
		C 1080
	鎌倉時代	5 A 1110
		B 1140
		C 1170
元	南北朝	6 A 1200
		B 1230
		C 1260
南北朝	南北朝	7 A 1290
		B 1320
		C 1350

図1 京都出土土師器の時期区分と年代観  
平尾2019を引用・追記

よっては青磁よりも多い白磁が出土する。またこの時期は青白磁や施釉陶器類も共伴し器種・器形共に最も多様な時期と評価できる<sup>3)</sup>。また白磁は、11世紀代から継続的に見られる器形（玉縁状口縁碗など）もあれば、12世紀の中頃もしくは第4四半期に登場し13世紀前半まで出土する器もあり、変化しているのは青磁だけではないことがわかった。

櫛描文・劃花文青磁がいつ出現したのかは研究史上の重要なテーマであるが、出土量が減る時期についての議論は聞かない。しかし、京都の出土例では蓮弁文青磁に共伴する例が多数あり、とくに皿類については13世紀代を通して出土する。出土期間が約100年に及べば型式変化は想定すべき前提となる。

つまり櫛描文・劃花文、あるいは「同安窯」系・「龍泉窯」系青磁の出現時期と言っても、その“言葉”と出土資料が一致しているとは限らず、地域毎に型式の差異がある資料を扱っているとすれば、議論は平行線をたどるか間違った方向に進むことになるだろう。また櫛描文・劃花文青磁にも型式変化があり、廃棄される時期幅が約100年以上に及ぶ可能性があれば、櫛描文・劃花文青磁というだけで時期の比定をすることは適切ではないと考えられる。

そこで本稿では櫛描文・劃花文青磁の型式変化を含む出土実態について整理するとともに、白磁というだけで12世紀前・中葉に位置付けられる傾向にある当該期の白磁の形態についても併せて整理を試みる。

## 2. 櫛描文・劃花文青磁の分類

### 2つの群と研究史上の呼称について

当該期の青磁は、研究史上、体部内外面の櫛描文が特徴的な黄味の強い釉調のものが「同安窯」系、櫛描文や劃花文をもち青味がかかった釉色が多いものが「龍泉窯」系と呼ばれてきた<sup>4)</sup>。

なお「同安窯」系青磁については伝世品の「珠光青磁」に類似した陶磁片が初めて採取されたことから「同安窯」の名を冠してきた<sup>5)</sup>が、亀井明德氏<sup>6)</sup>、森達也氏<sup>7)</sup>、徳留氏・平原氏ほか<sup>8)</sup>などによって同安汀溪窯ではなく、同じ福建省内の莆田窯や福清窯などで焼造された可能性が高いことが指摘されている。

『日本出土の中国陶磁』の中で、今井敦氏は、唐から五代にかけて越州窯系青磁を焼いていた浙江省地域では「十一世紀から十二世紀にかけての間に、生産窯の盛衰と主導的な生産窯の交代、製作技法や様式の転換が進行したと考えられる。」<sup>9)</sup>ため「このタイプの青磁の分類名称として「龍泉窯」の名を用いることについては、若干の注釈が必要であると思われる。」<sup>10)</sup>という。

現在の浙江省一帯は、「数多くの青磁窯があり、生産規模が大きく質の優れた青磁を焼く中心的な窯と、その影響下に類似の製品を焼く窯とがあって、いくつかの「窯系」を形成していた。〈中略〉浙江省内には依然として調査が行われていない地域や窯址が多く、越州窯の終末期の様相も明らかでない。〈中略〉十一世紀から十二世紀にかけての時期は「越州窯系青磁」ととらえられる唐・五代の青磁と質・量ともに龍泉窯

が絶大な地位を確立した南宋後期・元の青磁との間のいわば「過渡期」にあたり、この時期の「浙江青磁」をどのように考えるかという議論を先送りしたまま、生産窯の特定だけを急ぐことは、適切さを欠くといわなければならないであろう。<sup>11)</sup>と指摘する。

また「同安窯系」については、「類似の青磁を生産した窯址は、このほかにも南安窯、莆田窯など、福建省内に数多く発見されている。それらのなかで、生産規模が大きい窯はどこか、比較的質の高い製品を焼いた窯はどこか、あるいは発祥が古い窯、周囲の窯に対し影響力をもった窯はどこかなどの点について、今のところほとんどまったく展望が得られていないといってよい。また、同安窯にしても、青磁のほかに白磁も焼成しており、いわゆる「珠光青磁」専焼の窯だったわけではない。したがって「同安窯系」の名は、あくまでこのタイプの青磁に冠せられた分類名称であることを認識しておく必要がある。」<sup>12)</sup>と指摘する。

これらは1995年のものであるが、現在でも的確な指摘と言えよう。

なお、「同安窯系」青磁の産地同定については、既に複数の論考が出されており、「珠光青磁」については最新の研究成果がある<sup>13)</sup>ため、本稿では産地については判断しないという立場をとる。本稿の目的は、京都市の出土資料を整理することであり、そもそも産地同定は、生産地での研究が進まない限り不確定な要素が拭いきれず、消費地出土資料は、搬入時に「当時」の目利きや流行による選別を経た資料であるから同定には向かない。

とはいえ、所謂「同安窯」系・「龍泉窯」系青磁はやはり分類上避けられない大きな分類項目であるため、便宜的に「同安窯」系青磁を青磁D群、「龍泉窯」系青磁を青磁R群と仮称する。

### 3. 2群の青磁の様相と特徴

#### 器形の種類

櫛描文・劃花文青磁の主な器形の種類は、出土量が増え、多地点で類似の様相を示すつまり輸入する器形がある程度絞る

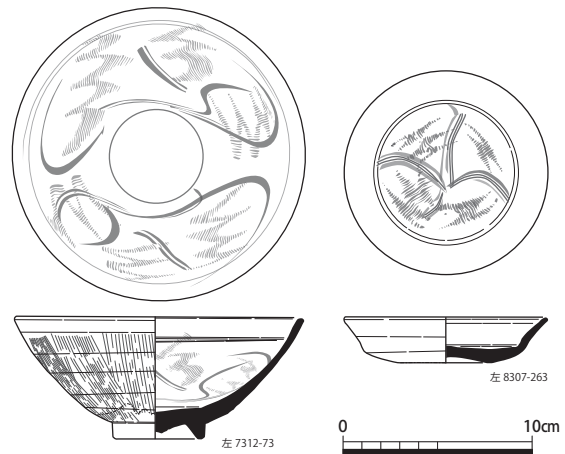


図2 青磁D群の椀・皿(主な器形)



図3 青磁R群の椀・皿(主な器形)

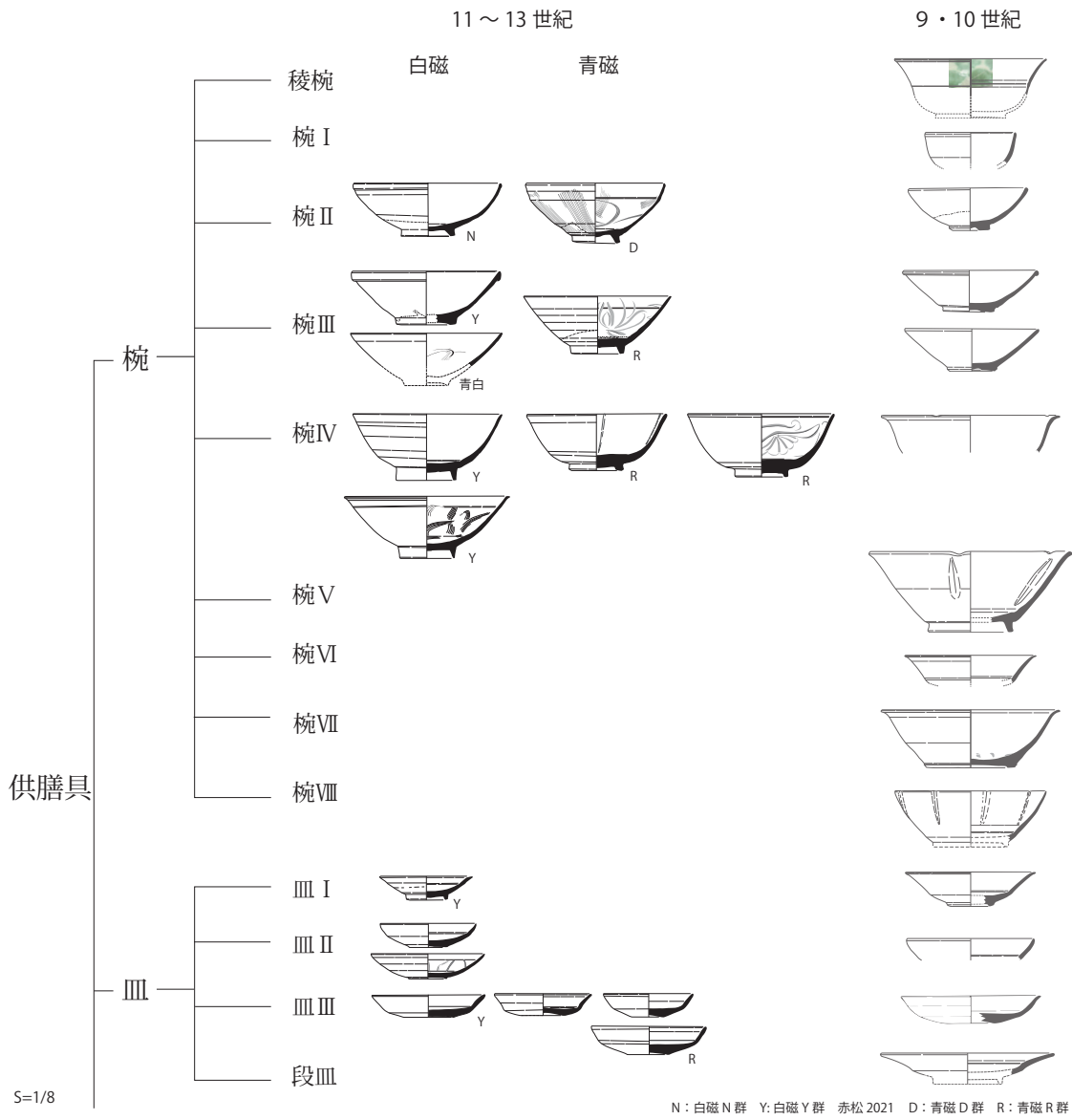


図4 碗・皿の形態分類 (1:8)

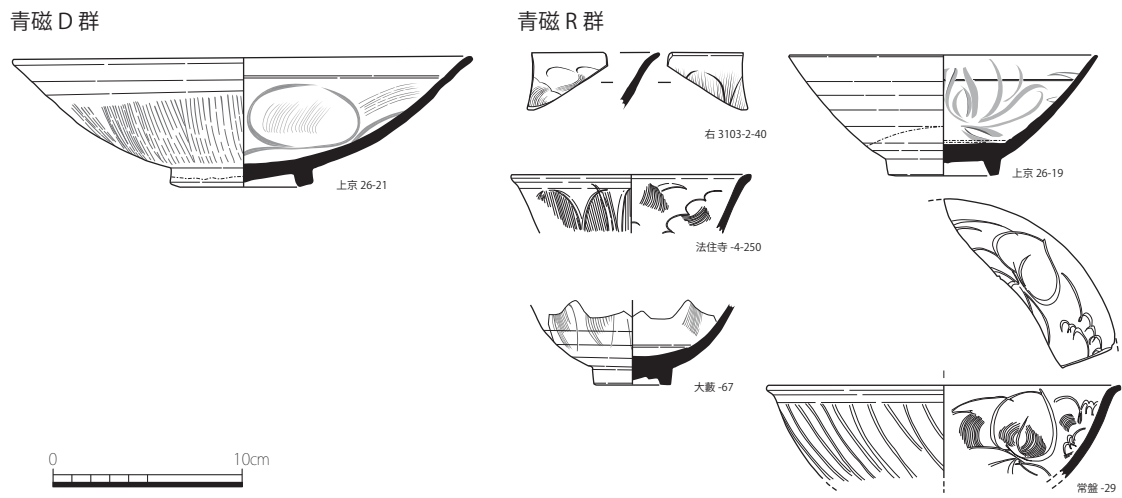


図5 青磁その他の器形 (1:4)

込まれて安定した様相を示す—13世紀前葉を例にすると限られる。青磁D群(図2)は椀1種類(図4椀Ⅱ<sup>14)</sup>、以下図4を省略)と皿1種類(皿Ⅲ)と、青磁R群(図3)は腰部が膨らむ椀1種類(椀Ⅳ)と皿1種類(皿Ⅲ)である。

ただし、各群ともに少数しか出土しないその他の器形もある(図5)。青磁D群は口縁が約24cmほどある大型の椀(鉢)、青磁R群には所謂「斗笠椀」や外面櫛描蓮弁文の椀、外面片切彫条線文の大型の椀などがあるが、出土量の割合にすれば全体の1%にも満たない。この状況は多様な櫛描文青磁が出土する博多とは異なる<sup>15)</sup>。

椀の器形が各1種類と聞くと違和感があるかもしれないが、その違和感は、特に青磁R群の文様が多種類であることによると

思われる。文様の種類は異なるが器形の形態は同じである。以下、群ごとに詳述する。

### 青磁D群

D群には、器形の種類は同じだが、成形や施文が異なる2つ以上の群が内在している(図6)。1つは椀・皿の両器形で全数量の90%以上を占め<sup>16)</sup>、底部の厚みなどの成形時の特徴や施文の類似性から一つに括れる群(本稿ではDD群と仮称)で、もう1つは、その他の特徴を持つ椀・皿である。後者は、各々少数しか出土例がないため現時点での細分は難しい。

DD群の椀の文様は基本的に1種類である。外面は細い櫛描文、内面は櫛描と片切彫を組み合わせた文様で、時期が下がるほど文様構成が崩れる方向に変化する。

DD群の皿もやはり施文の基本パターン

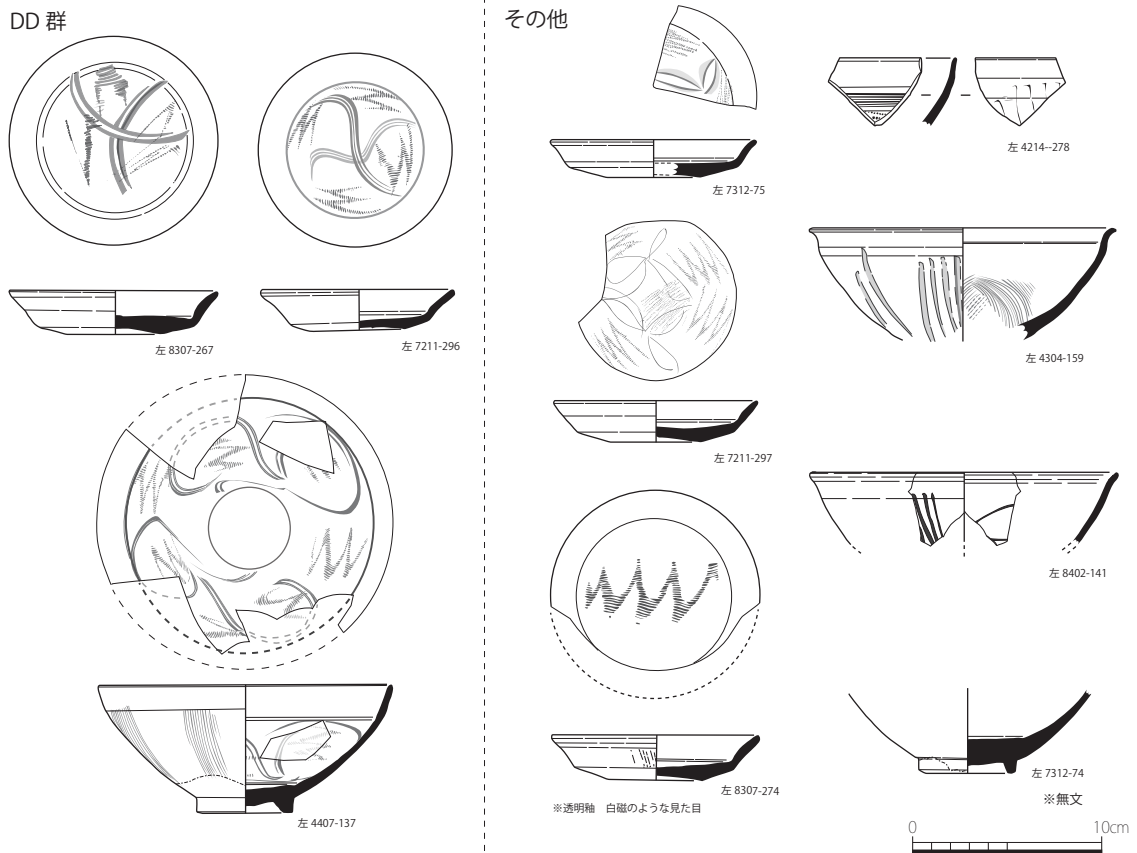


図6 青磁D群に内在する2群(仮称DD群とその他)

は1種類である(手癖による違いはある)。ただし12世紀第4四半期から13世紀の初頭と推定される皿(図20の6Aとつくもの)は、文様に多少のバリエーションがありこの段階ではパターンが定型化していない。また、時期が下がると文様の省略や無文も増える。

その他の特徴をもつ椀・皿は、少数しか出土例が無いいため特徴を抽出するのが難しいが、外面を約5mm幅のヘラ切り条線で飾るものは底部の厚みや底部外面の形態、内面の文様なども異なる(大きな破片の出土例が無いので内面の文様の全体像は不明)。皿も12世紀代で無文のものや、細い櫛描きのみで飾られているものは胎土や釉調が異なる。これらは細かく分けると別の生産体の製品と推測される

とは言え、これらの差異は小さなもので、発掘調査の報告段階では殊更分ける必要は無いと考える。これまで指摘されてきたように、青磁D群を福建省沿岸の窯で焼かれた製品群であると捉えれば、器形の形態や劃花文や櫛描文で飾る文様構成などの特徴は類似性が高い。

#### DD群の文様

全体の90%以上を占めるDD群については破片資料も含めると出土量が一定量あり、特徴を抽出できた。

椀の文様(図6)は、外面は細い櫛描文、内面は口縁部のやや下に1条、まれに2条の沈線を描き、その下部に片切彫りと櫛描きを組み合わせた文様が配置される。構成は、下端が長くのびる“○”あるいは“の”の字状になる完結しない円を描き、円の内外に櫛描を施す文様を基本とする。原型は

草花文であったと推測される(図2椀は元の要素を残している)。この円は基本的には2個1対である。2個の円と下端を走る横方向のヘラ描き、円の中の櫛描文を1セットとした文様を2セット描き、それぞれ間に櫛描文がくるように配置される。ただし、この基本構成も手癖や勢いでかなり崩れたものがある。

施文の順番は、基本的には櫛描文が先で片切彫りが後である。

時期が下がるとさらに省略が進むが、現時点では提示できる良好な例が無かった。

皿は底部内面に施文する。“ノ”字状と“く”字状の片切り彫りを組み合わせた中央の文様とその隙間4ヶ所に施された“ジグザク”状の櫛描文を基本の構成とする(図6)。図案が崩れているため何の文様かは不明だが、おそらく草花文と推測される。ただし、ヘラ描きや櫛の施文状況に手癖や勢いによる違いがあり印象は千差万別である。

施文の順番は、多くの個体では櫛描きが片切彫りに切られているのが観察されるため、櫛描きの後に片切彫りを施すのが基本的な工程であったと考えられる。時期が下がると3ないし4展開する櫛描文のみが描かれた皿が散見されるが、これは形からDD群の皿と考えられ、無文の割合も増えることから片切彫りの手順が省略されるようになったと推測される。

#### 青磁R群

椀の文様は主に4種類(図8)で、堆線 で表現された輪花、蓮華文、変形蓮弁文、花卉文(草花文)が確認できた。堆線のあ る輪花椀は五輪花と六輪花がある。唐・五

代の越州窯系青磁から続く伝統的な文様<sup>17)</sup>でこの中では少し古くなると解釈できる。このうち出土量が多いのは蓮華文である。蓮華文は厳密には1種類ではなく、蓮華の花と葉(図7)を基本パターンとして、3あるいは4展開させる文様構成である。なお花には蕾を表現したような多少のアレンジもある。変形蓮弁文は2重の片切彫りで花卉状の囲みを描き、中央に文様を描く構成で、元代のラマ式蓮弁文に通じる。花卉文は縦横に走る櫛描文が印象的である。京都出土のものは雲のようにスソが伸びる劃花文が三展開するものばかりだが、博多や中国で出土するやや古相のものには花卉の

表現がある。

底部内面は文様が付く場合も無文の場合もある。片切彫りによる花文や「金玉満堂」の文字印などがあり多様である。

青磁R群の皿は、花文・魚文などがあり、特に花文には多様なパターンがある。片切彫りを主体にして施文される。

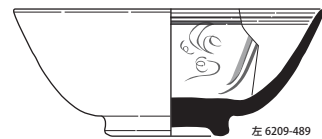
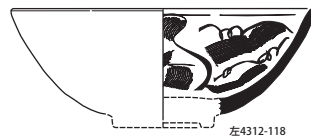
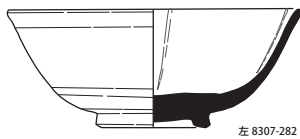
#### 型式変化

型式変化を副題としたが、実は説明が可



図7 蓮華文の文様パターン

#### 碗の形態



#### 青磁R群の文様種類模式図



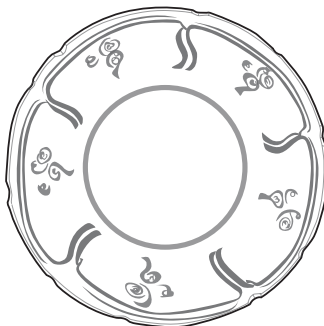
蓮華文：南海1号沈船



蓮華文：博多遺跡



蓮華文：左京八条三坊七町



変形蓮弁文：大宰府15)



花卉文：大宰府15)



花卉文：博多16-SK749

図8 青磁R群碗の形態と文様種類

能な型式変化が観察できたのは皿のみである。京都における櫛描文・劃花文青磁碗の主な出土年代は12世紀第4四半期から13世紀第4四半期までだが、13世紀の第1四半期後半には蓮弁文の青磁が出土し始めることから、量的なピークは12世紀の第4四半期から13世紀第1四半期までの50年程度と推測される。50年という時間幅は、京都出土輸入陶磁器の様相に段階を設けるとすれば、概ね1段階の幅と言える。このため量的な把握が難しく型式変化を追うことが困難であった。

京都出土遺物は都市遺跡の性格上その多くが廃棄資料である。それ故に本稿で扱う年代観は基本的には土師器の段階区分による廃棄年代を基準としている。中国の紀年銘墓出土資料との年代差は30年程見える場合もあるがほとんど無い場合もあり、墓や経塚出土資料は同時期の廃棄資料よりも新しい特徴をもつことが多い。手に入れてから廃棄までには一定の使用期間もあるが、多くのものは半世紀以内に捨てられている。とはいえ輸入陶磁器そのもので30年の年代幅を絞り込むことは難しく、土師器の段階区分を基準としている。

この点、特に青磁D群（量が多いDD群のみ。以下型式変化はDD群について説明）の皿は7A段階まで量的な出土が追えるため法量の縮小化などを観察することができた。型式変化については皿を基軸とし、碗については、型式学的な観点からみた“傾向”について記述する。

#### D群 年代による出土傾向 (図11)

D群の皿は12世紀の第4四半期から13世紀の末まで一定量出土する。これに比し

て碗は、主に6Aから6B段階古相に出土する傾向があり、13世紀前葉を過ぎると目立った存在ではなくなる。

#### 皿の型式変化 (図9・10)

皿は、法量の縮小と施釉および底部外面のケズリの見え方が特徴的に変化する。

12世紀第4四半期に位置付けられる左京八条三坊七町跡SD24<sup>18)</sup>からは皿が9枚出土しており、口径の分布域は10.7～11.0cm、施釉は体部外面の下端（底との境界）まで施される。これは施釉後に底部を削って仕上げるため、結果、外面の釉は体部外面下端まで観察される。底部内面は広く、体部は上方に立ち上がる。

これに対し、13世紀後葉に位置付けられる左京五条二坊十町跡-SK751<sup>19)</sup>では7枚がまとまって出土しており、口径は9.7cm～10.2cmである。施釉は体部外面の下半部までで、漬け掛けのため施釉境界は波打っている。施釉が個体によっては体部中央までにおさまり、カンナの削り痕が観察されることも多い。形態は浅くなり、体部は斜め方向に引きあがっている。古いものと比較すると口縁端部のナデが強くなっているものも多い。

施文は13世紀以降定型化するが、左京八条三坊七町跡SD24段階ではまだ様々な描き方をしている。13世紀後半は、無文が多く、片切彫りの省略も多い。

#### 碗の傾向

D群の碗は型式変化が追えないが、烏丸線No.73から出土したDD群の碗（図2左）は比較的古い要素を残していると考えられる。ただし似た年代観の資料ですでに文様が崩れた碗も出土しているため、時期差か



技術差かは不明である。

変化は時期が新しくなると口縁部下条線の位置が低くなり体部が薄く腰がやや膨らみ、文様構成は崩れて粗雑な円状になる傾向にある。

### R群 年代による出土傾向 (図11)

R群は劃花文の椀・皿ともに6A段階か

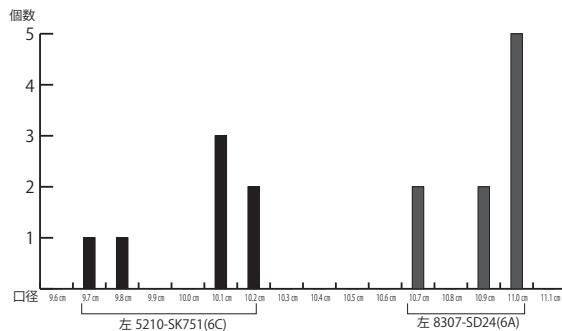
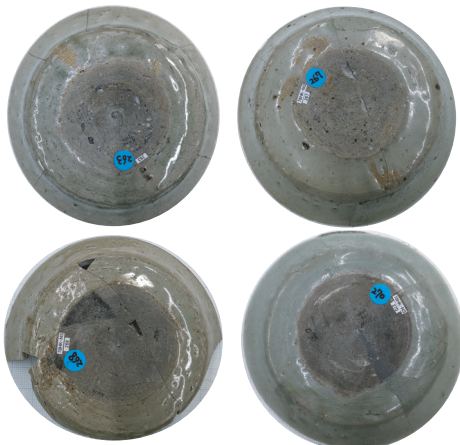
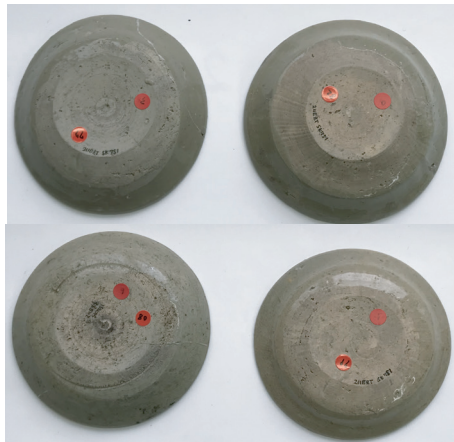


図9 口径分布の差



左京八条三坊七町跡 SD24 出土 (12世紀第4四半期頃)



左京五条二坊十町跡 SK751 出土 (13世紀後葉頃)

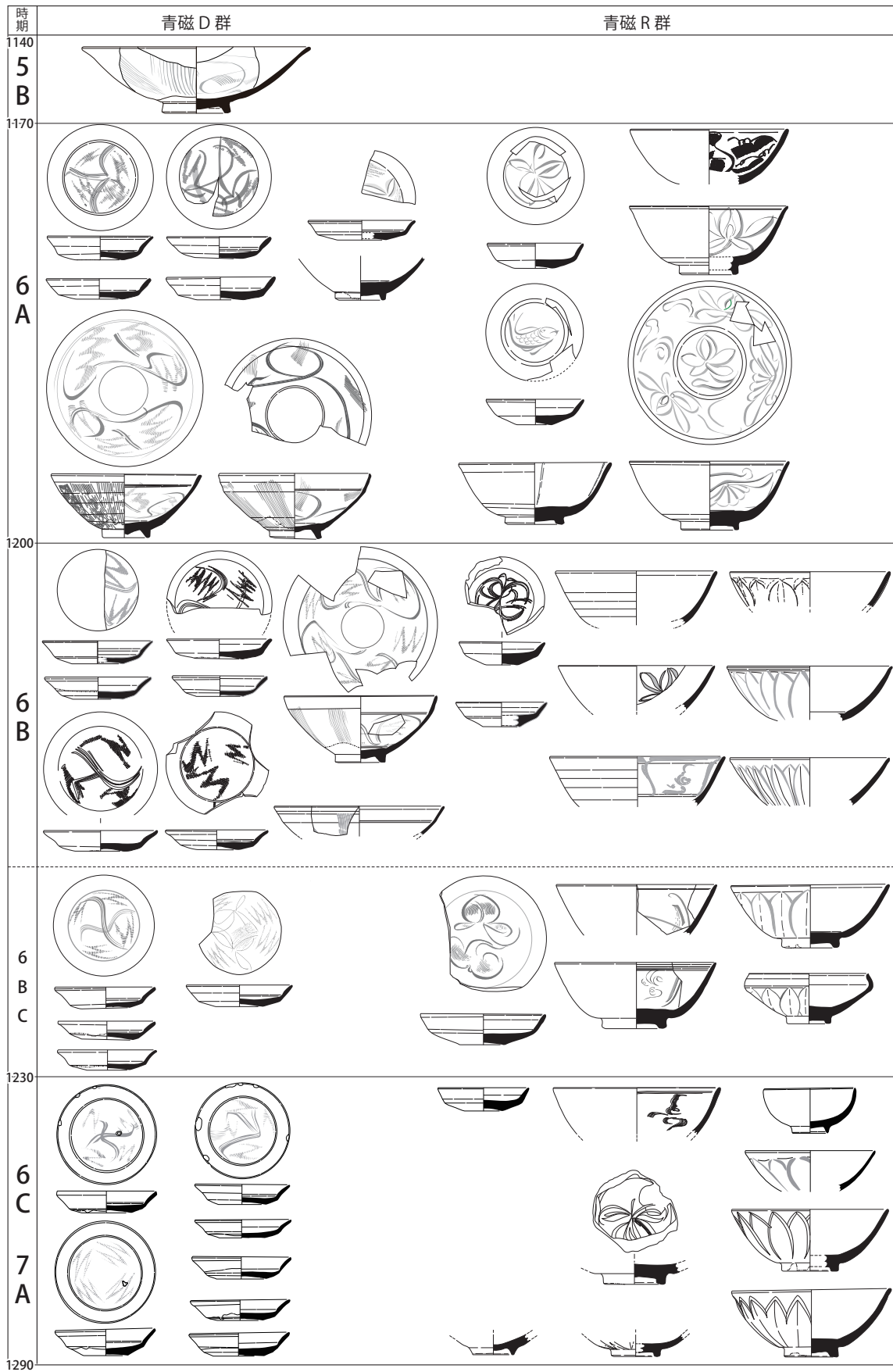
図10 底部の処理の違い

ら7A段階まで出土するが6B段階以降の出土量は多くない。特に先述のように6B段階の後半—13世紀第1四半期の後半には鑄蓮弁文の椀が登場し、13世紀後半に向かって量を増やしていくため、13世紀中頃以降の出土資料で口縁部から底部までの形態がわかる良好な資料は現時点では見つからなかった。

R群の椀の内、堆線で表現された輪花椀は6A段階と想定している左京八条三坊七町跡SD24に良好な出土例があるだけだが、型式学的な観点からは五代・北宋の様式でありこの中ではやや古い側に位置付けられる。これに対し変形蓮弁文の椀は京都では6A段階では見つからず13世紀前葉頃に見え始める。直線的なつながりは不明だが、変形蓮弁文の椀が堆線のある輪花椀に後出する文様である可能性がある。なお変形蓮弁文の椀は口縁端部に輪花があるものもあるが、13世紀中頃以降は口縁端部に輪花が付かないことが多い。花卉文は出土例が少ないため詳細は不明だがこの中では古手に位置付けられる文様で現時点では13世紀中頃以降は見ない。

### 型式変化について

R群の皿は、複数枚まとめて出土している良好な例がないが、6A段階の左京八条三坊七町跡SD24では口径9.9cmと10.0cmであった。13世紀代後半の左京五条二坊十町跡-SK751では口径8.4cmで、土師器は共伴していないがD群皿から13世紀前半と推測される左京六条一坊七町跡土坑4では口径8.5cmと9.0cm、やはり時期が下がるにつれて口径が縮小し、底部が厚く、体部の立ち上がりも短く(浅く)なる。



S=1/6

図11 青磁D・R群 主な碗・皿の廃棄年代

他にR群の皿には上述の小皿とは別に口径13cm前後の皿がある。この中型の皿は、出土点数が少ないため不明な点が多いが現時点では13世紀中葉頃から出土する。

R群の椀の形態は、時期が下がるにつれて腰の張りが弱くなり浅くなる傾向にある。外面鎬蓮弁文の椀が量的に出土するようになる13世紀中葉以降も見られる劃花

文の椀には、蓮華文と変形蓮弁文の椀があるが、どちらも施文が粗くなる。蓮華文は線が太く雑になり、反転数が少なくなる。変形蓮弁文は口縁部の輪花表現がなくなり、一筆書きで描かれていた花卉の曲線が崩れて、適当に描かれた縦横方向の直線的な施文になる(図12)。



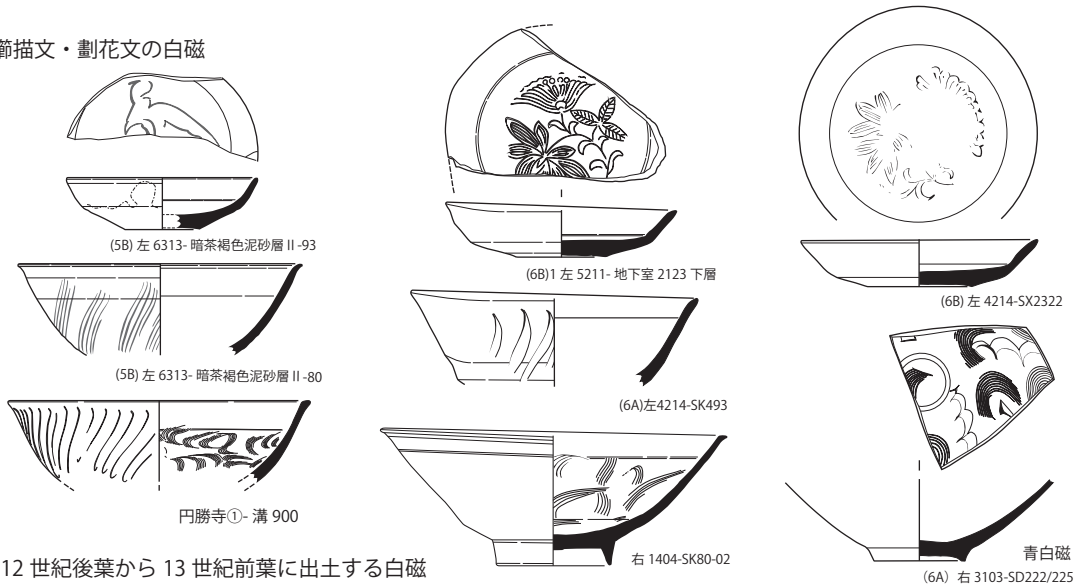
図12 粗雑化した変形蓮弁文

#### 4. 12世紀後葉から13世紀前葉の白磁

##### 櫛描文・劃花文の白磁

櫛描文・劃花文というと青磁の印象であるが、12世紀後半の白磁には櫛描文が施されているものもある。中でも青白磁の椀

##### 櫛描文・劃花文の白磁



##### 12世紀後葉から13世紀前葉に出土する白磁

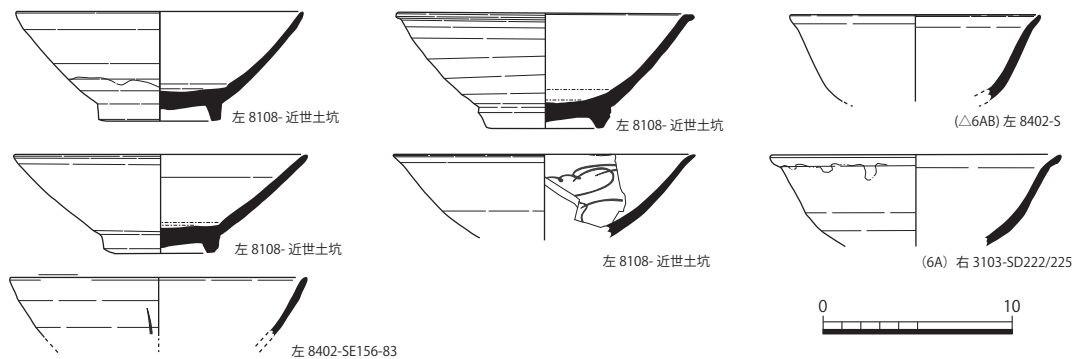


図13 櫛描文・劃花文の白磁及び12世紀後葉から13世紀前葉の白磁

には時には青磁よりも精緻な櫛描文・劃花文を持つものがある。

また底部内面が平らで広い皿(皿Ⅲ)は、白磁・青白磁・青磁で類似の形態をとることから、宋代には器種を問わず作られた一般的な器と評価できよう。なお皿の底部内面には、青磁と同様に草花文が施されるものもある。また、白磁の椀外面に片切彫りか櫛描きの条線が施されることもある。

### 12世紀後葉から13世紀前葉の白磁

京都における13世紀初頭の出土資料には多数の白磁が含まれている。それは決して古いものの混入ばかりではなく、出土例を整理すれば12世紀後葉から13世紀の初頭にかけて登場する器形がある。体部から口縁部まで直線的に斜め方向に延びる所謂「斗笠椀」(椀Ⅲ、図13下段左)や腰が丸く張る椀(椀Ⅳ)で口縁端部内面を強くナデるため端部が屈曲気味に外反するもの(図13下段右)は、12世紀後葉から13世紀前葉に見る形態である。

この後白磁は13世紀中頃から、所謂「口禿」の白磁椀・皿が出土するようになり、器形が選択的になるが、図13下段右端は形態としては「口禿」白磁椀に通ずるものがあり、先行的な形と捉えることができる。

なお、11世紀代から継続する器形も、玉縁状口縁の椀で玉縁がかなり太くなったものは12世紀後半以降の形態であるし、大宰府分類白磁椀Ⅴ類も口縁端部が外方向に折れるものは同じく12世紀後半以降の特徴で13世紀初頭までは出土する。

青白磁については前稿にまとめた。

以上のように、櫛描文・劃花文青磁と同

時期の12世紀第4四半期から13世紀前葉の白磁について概観すると、白磁にも変化があることが分かると共に、器種を越えた共通性が整理できた。櫛描文や劃花文などの施文は、宋代の文様における流行と捉えられるし、皿(図4皿Ⅲ)についても、器種を越えて類似の形態を取ることから汎用性が高い形態であることが分かった。

ただし椀の形態については、白磁、青白磁、青磁D群・R群で共通性が低いことが反って明るみに出たように思う。とくに青磁D群とR群の椀は主な器形が各々1種類しかないのになぜか別の形態をしている。

またD群の青磁は通史的にみれば12世紀第4四半期から13世紀にしか存在せず、この点で青磁R群や白磁と異なっている。特に青磁D群の椀については所謂「同安窯」系青磁という呼称や「珠光青磁」として後に珍重された点など謎が多い。

そこでこの椀については若干の考察を加えたい。

## 5. 所謂「同安窯」系青磁の椀について

本稿では所謂「同安窯」系青磁を仮称青磁D群とした。これは、

1. D群は先行研究から「同安窯」産では無い事が明らかになっている。
2. 京都出土資料を精査したところ、厚みや文様などの細部が異なる複数のグループが混在していることがわかった。
3. 福建省では宋代に多数の窯で所謂「同安窯」系青磁と類似した特徴の器を作っている。

4. 上記から、そもそも複数の窯の製品が輸入されていると考えられる。

といった観点から「窯」の意識を外して群別するための仮の処置であった。

この「同安窯」というのは、1952年に中国の福建省同安県汀溪水庫開発に伴い水庫予定地に発見された古窯址を指す<sup>20)</sup>。ここから、江戸時代や明治時代に茶碗として伝世し、大正時代には「珠光茶碗」・「珠光青磁」として認識されていた外面櫛描きの青磁に似た資料が初めて見つかったことから、これを「同安窯系青磁」と呼ぶようになった。

ただし先述のように、同安汀溪窯の資料と日本で量的に見つかる青磁碗は細部の特徴が一致しないこと<sup>21)</sup>が明らかになっており、現在では“所謂”をつけて呼ばれることが多い。

所謂「同安窯」系青磁（以下必要な場合を除き“所謂”を省略）は、先に引用したように「窯系」を形成するような中心窯が見つかっていない<sup>22)</sup>にも関わらず、福建省では北宋後半から南宋前半にかけて似通った器を多数の窯で作っていることが明らかになっており<sup>23)</sup>、中国陶磁史の上でもやや特異な製品といえる。

中国での生産状況も未解明のことが多い「同安窯」系青磁であるが、京都での出土状況からも少々特異な点が挙げられる。京都出土資料としての特徴をまとめると

- ・全体の9割を占めるDD群と少数の別の特徴を持つ碗・皿が混在している。
- ・しかしどの特徴のものも碗・皿の基本形態は類似している。
- ・D群碗は12世紀第4四半期から13世紀

前葉までに出土が限られる。

- ・皿は13世紀末まで出土する。
- ・皿は形態が青磁R群や白磁と類似しているが、碗は形態がR群や白磁と異なる。

といった点が挙げられる。碗は形態が特異なだけでなく、一定量出土する期間が京都の土師器区分6A段階（1170-1200）を中心とする約50年に限られており、皿が13世紀を通して在るのとは対比的である。

またこの碗は形態がやや特異で、他の時期にはほとんど見ない形をしている。

なお、当該期に共伴する龍泉窯青磁の碗は形態が異なる<sup>24)</sup>。龍泉窯では1種類の碗だけではなく、形態の異なる多種類の碗・皿・鉢などに櫛描文・劃花文を施していること（図15）から、櫛描文・劃花文という文様だけで「同安窯」系青磁と「龍泉窯」系青磁の碗を一括りにすることはできない。基本的に中国の陶磁器における文様は汎用性が高く、器形の形態とは分けて考えた方が系統分類には有効と考えられる。

これらをまとめると「同安窯」系の碗は、京都に一定量搬入された段階では唯一の形の碗であり、この形の碗は限られた短い期間しか需要が無かったと推測される。

#### 碗の特徴

通時代的に見るとやや特異な状況を呈す「同安窯」系青磁碗であるが、その見た目上の特徴は大きく2つに整理されよう。

1つは小さめの底部から体部が斜め上方にやや直線的に立ち上がり、口縁部下にめぐる沈線（圏線）あたりで屈曲して口縁部付近は上方、もしくは強いナデのためやや内向きに屈曲して立ち上がる内湾気味のプロポジションである。

もう1つは、外面の条線文と内面の櫛描き・片切彫りの文様である。

ただしこの特徴的な椀は福建省のオリジナルではない。龍泉窯をはじめとする浙江省でも、上記2つの特徴を備えた類似の椀が北宋後半から南宋始頭にかけて生産されていたことが知られている<sup>25)</sup>。そして日本でも博多では、浙江省産と考えられる椀やDD群とは異なる福建省産の椀が12世紀代の白磁に共伴して出土している<sup>26)</sup>。

### 博多・中国での見え方

博多で出土する12世紀代の櫛描・片切彫文の内湾する椀を例示すると、博多港湾線第1次調査のSE39-1063、港湾線第2次調査の683号土壙-16、同649号土壙-11、原遺跡14のSR062-260など<sup>27)</sup>があり、他に包含層資料であるが型式学的にやや古層と考えられるものに高速鉄道VI-F区包含層資料2・11・12<sup>28)</sup>などがある。博多遺跡群の各調査報告書に散見される<sup>29)</sup>。



※田中 2019 の分類を下に作成

図14 博多出土の櫛描・片切彫文の内湾する椀 (1:4 引用文献は22頁に記載)

ただし、これらの椀はそれぞれの調査で少数出土するのみで累計数は決して多くない。京都でも稀にしか出土例が無いことから、日本向けの輸出品というよりは博多に拠点を持つ宋人の持ち物であった可能性が高い。

中国で上述の特徴の椀が出土する古い例としては、北宋代の福建省順昌県太坪林場墓の副葬品<sup>30)</sup>が挙げられる(図15)。この墓は博室の夫婦合葬墓で、出土銭貨から11世紀後葉の年代観が推定されている。少し古いとされる男室からは櫛描・片切彫文の直線的に開く所謂「斗笠椀」が出土し、女室からは櫛描・片切彫文の内湾する椀が出土した。中国では福建省産<sup>31)</sup>と考えられており、この例から11世紀後葉にはこうした椀が生産されていたと推測される。

浙江省では、龍泉金村窯の下層から櫛描・片切彫文の椀が出土している。龍泉金村窯の2013-2014年試掘調査報告書<sup>32)</sup>にはこうした特徴の椀(図15)は北宋代晩期の製品として掲載されている<sup>33)</sup>。また、同報告書で北宋前・中期と位置付けられている青磁は越州窯系青磁の特徴を備えていることから<sup>34)</sup>櫛描文の椀は北宋後(晩)期頃から生産され始めたと推測される。

なお、龍泉窯では、小さめの底部から体部が斜め上方にやや直線的に立ち上がり、口縁部下にめぐる沈線あたりで屈曲して口縁部付近は内湾気味になる形態の椀は比較的短い期間しか生産されていない。北宋後期には量産していたようであるが南宋前期には数が減り(図15-415)南宋中期頃にはほとんど生産されなくなったようである<sup>35)</sup>。櫛描・劃花文の椀は南宋代にも量産し

ているため、これまでは議論の俎上に載せられることが無かったが、日本に多量に輸入される頃には、龍泉窯では上述の2つの特徴を持つ椀は量産されていなかった可能性が高い。なお、龍泉窯では多種類の器形に櫛描・片切彫りの劃花文を施しているが、器形によって施文の基本ルールが多少異なっていた可能性がある。

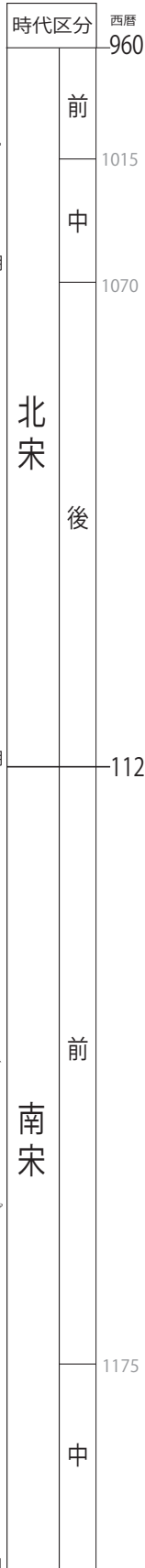
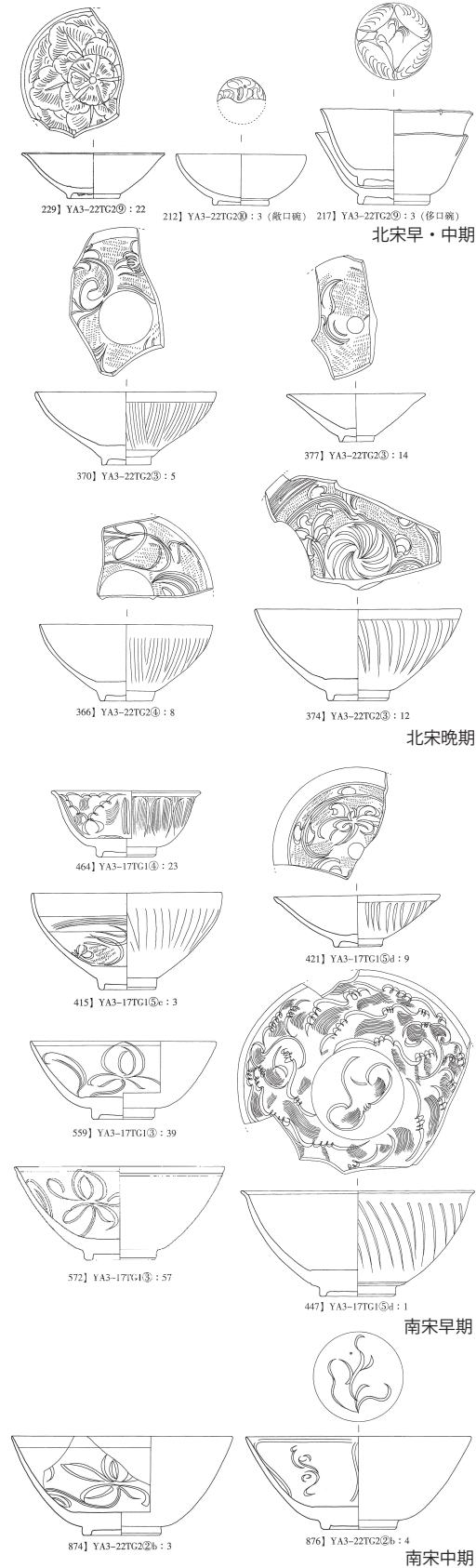
本稿で取り上げる椀は、外面は櫛描きか片切彫条線文、内面は口縁部やや下に圏線をつけ線より下側(見込み側)に施文することを基本とするが、これと同じ外面に条線文を施す椀の中でも、口径が18センチ前後あり器高も高く腰が張る大きな椀(図15-447)は、内面の文様を口縁部端まで施している。この点から、本稿が題材としている内湾する椀の施文にはなんらかのモデルがあったことが推測される。

博多・中国の資料から「同安窯」系青磁の椀に先行する椀が11世紀後葉から12世紀代には福建省・浙江省で多数生産されていたことがわかった。これらの施文は丁寧で精緻なものも多く一定の価値を持っていたと推測される。しかしこの12世紀代の椀は、日本では博多周辺で一定量出土するものの、京都ではわずかししか出土例が無いことから、基本的には日本向けに輸出されたものではなかった可能性が高い。

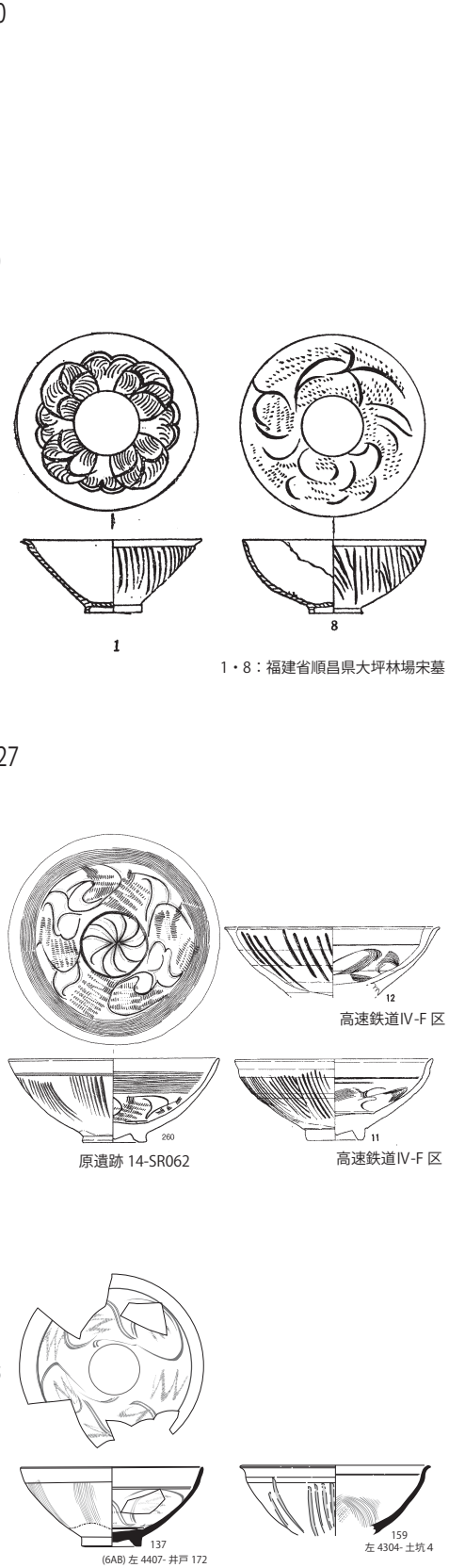
### 流行の器形

先に紹介した福建省順昌県太坪林場墓に副葬されていた椀を浙江省産ではないかと考える意見もあるが<sup>36)</sup>、筆者は中国での見解のとおり福建省産ではないかと考えている。だとすれば、浙江省産も福建省産も生産開始時期はそれほど差がないのではなか

浙江省 (龍泉金村窯)



福建省



※浙江省は全て龍泉窯金村試掘報告 2019 より転載

S=1:6

図15 龍泉窯金村窯 (浙江省) 出土青磁の様相と福建省の櫛描・片切彫文の碗



ろうか。

これまで「同安窯」系青磁は、初期の特徴の一致から龍泉窯の影響を受けて生産を開始したと考えられてきた。このため、福建省産の櫛描文青磁を「倣龍泉窯青瓷」と呼称する考え方もあるが<sup>37)</sup>、福建省の青磁は不思議と後の時代の蓮弁文碗を模倣した製品を量産していない。龍泉窯を代表する蓮弁文碗には倣わないことを不思議に思うのは後世の感覚かもしれないが、内湾する櫛描文・片切彫文の碗だけを模倣したとすればなぜなのだろうか。

福建省の陶磁器生産技術については、11世紀代の大量の白磁を考えれば一定の水準にあったと想定される。内面に櫛描文を多用する装飾技法の類似性から初期龍泉窯青磁碗の倣製品<sup>38)</sup>として福建産青磁を捉えてきたが、例えば景德鎮窯の青白磁にも内面櫛描文は多様されている<sup>39)</sup>。そもそも北宋後期の龍泉窯はまだ「窯系」を形成するような飛びぬけた窯ではなく、ようやく越州窯系青磁から脱して台頭し始めたばかりの窯なのではないだろうか。また13世紀代の福建省では蓮弁文青磁の模倣品は量産しないに関わらず景德鎮窯産青白磁の模倣品を量産している<sup>40)</sup>。

つまり筆者は、福建省は上述の特異な青磁碗を龍泉窯に倣って作ったわけではないのではないかと考えている。

福建省順昌県太坪林場墓ではやや古いとされる男室から外面条線文、内面櫛描文・片切彫文の「斗笠碗」が出土し、女室から同加飾の内湾する碗が出土した。

亀井氏は「櫛描文青瓷についての考察」<sup>41)</sup>で口縁部がやや外反する「斗笠碗」(図

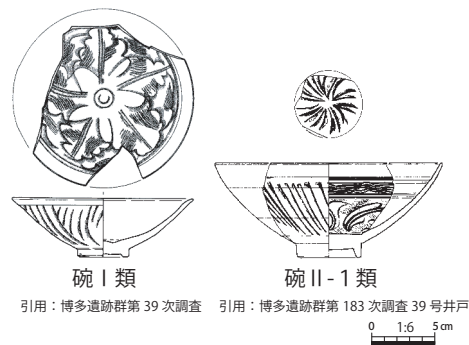


図16 亀井分類(亀井1995) ※図は報告書より引用

16碗I類)を先行する器形とし、これに内湾する碗(同碗II-1類)が続くとする。

筆者も、体部下半の特徴(小さめの底部、斜め上方にやや直線的に引き上げられる体部)から、内湾する碗は唐・五代からの伝統的な器形である「斗笠碗」を口縁部付近で曲げた派生品(以下、妙だが「内湾する「斗笠碗」」と呼称)だと考えており、そもそものモデルは加飾の「斗笠碗」だと推測する。

そう考えた場合、北宋中後期の中国で、広範囲の様々な窯が模倣したくなる青磁の加飾「斗笠碗」が特徴的な窯といえば「耀州窯」が浮かぶのではないだろうか。

森達也氏は耀州窯の特徴である印花文について「印花文青瓷の初現である遼清寧四年(1058年)の天津薊県独楽寺塔上層塔室の出土品では、北宋代の印花文青瓷の枝花文、外面の条線文など11世紀後半に盛行する印花文青瓷の定型的な様式がすでに確立しており、印花文の初現はさらに遡る可能性がある。」<sup>42)</sup>と言い、262頁掲載の図1には耀州窯から龍泉窯への器形と施文の影響を推測しており「耀州窯の青瓷の意匠の影響を強く受けている」<sup>43)</sup>とも述べる。

印花文は、耀州窯の優美な刻花文の量産型であることは論を俟たないことであり、

森氏の論ずるように11世紀の中頃には耀州窯青磁の代表的な加飾である内面の印花文・外面の条線文が成立していたと考えられる。

北宋後期の加飾「斗笠碗」は、青磁・白磁・青白磁のどれをとっても内面は比較的華やかで密度が高めの刻花か印花であり、印花でない場合でも内面口縁端部の下方（口縁部やや下）に広めの余白を残すことが多い。また口縁部やや下に圈線が付される例も多数ある。

耀州窯の印花文は型押しであるために口縁端部までの施文は難しく口縁部やや下に余白、あるいは型彫りの境界である圈線が付く（図17）。「斗笠碗」は、五代までは無文か堆線と輪花のような簡素な装飾である



図17 耀州窯印花 拓本  
 襍振西・杜文2004、109頁より引用

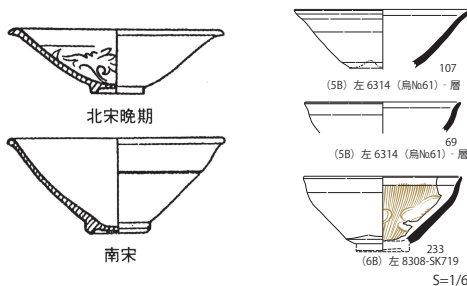


図18 耀州窯の蓋の形態変化と黒釉陶器の蓋の形態  
 耀州窯は襍振西・杜文2004、80頁より引用

ことが多いので、耀州窯の量産型印花文青磁が同時代の陶磁器に与えた影響は大きいと考えられる。

浙江省と福建省の内湾する「斗笠碗」は基本的には口縁部やや下に圈線が付き、時期が下がれば越境することもあるが、圈線の内に施文することを基本としている。

この点から内面の文様は耀州窯の印花から端を発した北宋代の流行に乗っ取ったものであり、外面の条線はまた耀州窯青磁「斗笠碗」の直接的な影響と考えられる<sup>44)</sup>。

これらの観点から12世紀代の「内湾する斗笠碗」の文様は、浙江省や福建省のオリジナルな特徴ではなく、広く北宋の流行に基づくものと推測されるのである。

ただし、耀州窯ではおそらく内湾するタイプの「斗笠碗」は生産していない。ではこの形はどういうことなのか。

これには、同じ福建省でつくられた建盞を代表とする黒釉陶器類を類例として挙げたい。

黒釉陶器の碗（盞）には体部が斜め上方に真っすぐ延び、口縁部直口あるいはやや外反気味の「斗笠碗」と、口縁部やや下で屈曲させ、さらに口縁部を強くナデることで独特の屈曲した口縁形態—所謂「スッポン口」の「天目碗」<sup>45)</sup>（本稿では以下この形を天目碗と呼ぶ。）がある。

「天目碗」も大きく括れば内湾する「斗笠碗」と言え、この器形が他の時代にはほとんど見ないことを考えると、器の形も、北宋後期から南宋前半に“流行”した形と推測することが可能ではなかろうか。

#### 福建省産の内湾する「斗笠碗」

先に引用したように今井氏は、福建省の

類似の青磁を生産した窯址のうち「生産規模が大きい窯はどこか、比較的質の高い製品を焼いた窯はどこか、あるいは発祥が古い窯、周囲の窯に対し影響力をもった窯はどこかなどの点について、今のところほとんどまったく展望が得られていないといつてよい。」<sup>46)</sup>と指摘した。この状況は、研究が進化した今も変わらないように見受けられる。だとすればこの状況こそが当該期の福建省産青磁の特徴であり、多数の窯で生産された類似の内湾する「斗笠椀」青磁は何かの流行の反映と推測されるのではなかろうか。

これまで述べてきた福建省産の内湾する青磁「斗笠椀」(所謂「同安窯」系青磁の椀)の特徴をもう一度まとめると

- ・福建省内では11世紀後半ごろから生産が始まった器形である。
- ・文様は耀州窯青磁の加飾「斗笠椀」の影響を受けており、これを口縁部付近で曲げた独特の形態をとる。
- ・福建省では12世紀以降、多数の窯で類似の器形を生産している。
- ・北宋後期に始まって、浙江省では生産が低下する南宋前半も量産している。
- ・京都では12世紀第4四半期を中心とする50年程度の短期間しか入らない。
- ・博多では12世紀代の遺構から丁寧な作りの先行形態の椀(浙江省産含む)が出土するが、それらは出土の様相から日本向けの商品とは考え難い。

と言った点が挙げられる。

またこれらの整理から、この椀の背景にある流行は、11世紀後半(北宋後期)から始まり、12世紀(北宋後期から南宋前期)

に盛行し、13世紀前葉(南宋中期)には浙江省では下火だが福建省ではなお流行っていたものであると読み取れる。

そして器形から、用途は耀州窯青磁の「斗笠椀」、あるいは黒釉陶器の「天目椀」に近いものと推測できるのではなかろうか。なお前者は煎茶、後者は点茶の「茶碗(盞)」として利用された器である。

ところで、宋代の「茶」について検討した高橋忠彦氏は、北宋代には福建団茶を賛美し「点茶」一辺倒であるが、南宋では「団茶点茶は滅びはしないが、その位置は相対化され、むしろ煎茶に親しみ、草茶を味わう風が前面に表れてくる。」<sup>47)</sup>というように、時代によって飲茶の方法と認識が変化していると論じた。

「茶」の歴史について筆者は門外漢であるし、出土資料から椀の用途を特定することは難しいことで、本稿の趣旨を逸脱するため論を重ねられないが、福建省産青磁の生産期間と南宋にも福建省では引き続き流行していた団茶・点茶の関係については議論の余地があるのではないかと感じた次第である。

## おわりに

量と付随する情報の多さのために本稿では櫛描文・劃花文青磁を中心に論じたが、本来12世紀後半から13世紀前半は、白磁・青白磁・青磁・施釉陶器などの他器種・多器形が共伴する日本輸入陶磁史上最も多器種・多器形の時代である。その背景については前稿で論じたので繰り返さないが、青白磁や施釉陶器類が共伴する多様な

状況は14世紀まで続くものの、13世紀後半には出土量の主となる供膳具類が、龍泉窯系の鎬連弁文青磁と所謂「口禿」白磁に淘汰されて、全体的な様相と印象はやや画一的な方向に変化する。13世紀の輸入陶磁器の理解の難しさは、13世紀を通じて同じ龍泉窯系青磁があり続けるのに、器形の印象が非連続的に変化する分かりにくさに起因すると考えられる。

この状況を分解せずに説明する力量が筆者には無いが、一方で、出土資料の評価は共伴する全ての遺物による全体像を重要視する発掘調査技師の心得から逸脱する点は、反省点である。全体像を示せなかったが、京都市内では共伴する輸入陶磁器が白磁だけで構成されている13世紀初頭の遺構もある。なお本稿の目的の一つには、考古学が潜在的に持つ「古い方が良いバイアス」へのささやかな抵抗もある。

あかまつ かな 赤松 佳奈 (文化財保護課 文化財保護技師 (埋蔵文化財担当))

年代観は仮説とは言え、なるべく事実に近い調査年代を検討しようと努力することが、自分のフィールドとする地域への誠意であることを諸先輩から教えていただいて今があります。感謝しています。

本稿を執筆にあたり以下の皆様・機関にはお世話になりました。記して感謝の意を表します。

上村和直、内田好昭、大立目一、尾野善裕、上別府亜紀、國下多美樹、児玉光代、佐藤隆、高橋潔、陳彦如、徳留大輔、新田和央、水橋公恵、平尾政幸、丸川義広、山本雅和、吉川義彦 関西文化財調査会、公益財団法人元興寺文化財研究所、公益財団法人京都市埋蔵文化財、古代文化調査会、株式会社文化財サービス

また、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、関西文化財調査会、平尾政幸氏には図データの提供をいただきました。

## 註

- 1) 「平安京左京五条二坊跡終了報告」関西文化財調査会2020 未報告、皿の底部調整や釉薬の範囲についての変化は調査担当者の平尾政幸氏よりご教示いただいた。SK751の出土資料については平尾氏より図の提供をいただき本稿図24に掲載。
- 2) 年代観については平尾政幸2019、12-13頁を使用。
- 3) 赤松佳奈2023、49-76頁。
- 4) 大宰府分類では龍泉・同安窯青磁0類、同安窯青磁、龍泉窯青磁I類と分類されるもの。横田賢次郎・森田勉1978
- 5) 李輝柄1974、80-84頁。
- 6) 亀井明德1995、66-67頁
- 7) 森達也2008、140頁
- 8) 徳留大輔・平原英俊ほか2018、84頁
- 9) 今井敦1995、111頁。
- 10) 今井1995、111頁。
- 11) 今井1995、111・112頁。
- 12) 今井1995、112頁。
- 13) 橋本素子・三笠景子2022、徳留大輔2023
- 14) 赤松2020を下に分類した。
- 15) 田中克子2019、57-66頁
- 16) DD群とその他の群に分かれることに気が付いたのが遅かったため、まとまった統計データが取れていない。実測図の集成時にはその他の群を意識的に集めたのでその他の群の割合がやや高くなっているが、出土資料の実態は左京八条四坊二町跡や左京八条三坊八町跡の発掘調査データのようにほとんどがDD群

である場合が多い。データの抽出は今後の課題とする。

資料	総数	DD群	その他	DD群割合	その他割合
集成椀	16	12	4	80%	20%
集成皿	57	53	4	93%	7%
左 8402 椀	16	15	1	94%	6%
左 8308 皿	321	318	3	99%	1%
			平均	91.4%	8.6%

- 17) 『上林湖越窯』古陶磁学術研究基金会叢書 慈溪市博物館・謝純竜編、科学出版社、2002年。
- 18) 『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所1982年
- 19) 前掲註1)。
- 20) 故宮博物院・福建省文物管理委員会1957、文物出版社56頁、李輝柄1974、80-84頁。
- 21) 前掲註6)、7)。
- 22) 今井1995、112頁
- 23) 福建省の各窯採集資料は『近年発見の窯址出土中国陶磁展』(出光美術館1982)や『東アジアの海とシルクロードの拠点福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—』(海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会2008)を参考にした。類似性と多様性が見て取れる。
- 24) 徳留2023「なおこの時期の龍泉窯青磁では、いわゆる初期龍泉窯青磁のタイプは見られない。」178頁。という指摘は同じ現象を指していると筆者は解釈した。
- 25) 亀井1992、2014。
- 26) 田中2019、57-66頁。
- 27) 図14の引用文献については表1にまとめた。
- 28) 図14の引用文献については表1にまとめた。
- 29) 田中2019、57-66頁。
- 30) 曾凡1983「福建順昌大坪林場宋墓」、35-39頁
- 31) 曾凡1983「福建陶磁の歴史」、177~179頁。
- 32) 浙江省文物考古研究所・龍泉青瓷博物館2019
- 33) 前掲註32)、214-218頁。
- 34) 前掲註32)、189-197頁。
- 35) 前掲註32)、415) YA3-17TG1⑤c:3が註26)の報告書では最も新しい。
- 36) 亀井2014、472頁。
- 37) 森2015、205頁。

- 38) 田中2019、73頁。
- 39) 櫛描文の青白磁の椀は京都では早いものでは5A段階(1110-1140)、文様が洗練されたものは5B段階(1140-1170)に出土する。
- 40) 前掲註23)、京都では6A段階になると景德鎮窯産青白磁よりも胎土や釉調の粗い青白磁の合子が出土する。
- 41) 亀井1995、27頁。図は椀1類：博多遺跡群第39次調査『博多14』—博多遺跡群第39次調査概報一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第229集、福岡市教育委員会、1990年、115頁、Fig.115  
椀Ⅱ-1類：『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ博多』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第183集、福岡市教育委員会1988年、24頁Fig.32より引用。
- 42) 森2015、79頁。
- 43) 森2015、80頁。
- 44) 襦振西/杜文2004、80頁、拓本109頁
- 45) 通常、中国産の黒釉陶器椀、特に建窯の蓋については、形態に関わらず「天目椀」と呼称されることが多い。
- 46) 今井1995、112頁。
- 47) 高橋1991、112頁。

## 引用・参考文献

- 赤松佳奈「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景(1)—平安時代前・中期の文化人が憧れたものは何か—」『京都市文化財保護課研究紀要第3号』京都市文化市民局文化財保護課、2020年、157-204頁
- 赤松佳奈「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景(2-1)—白磁分類への問題提起—」『京都市文化財保護課研究紀要第4号』京都市文化市民局文化財保護課、2021年、93-116頁。
- 赤松佳奈「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景(2-2)—量と質の変様—」『京都市文化財保護課研究紀要第6号』京都市文化市民局文化財保護

- 課2023年、49-76頁。
- 今井敦「四 鎌倉時代」中国の陶磁『第12巻 日本出土の中国陶磁』長谷部楽爾・今井敦編、平凡社、1995年、110-120頁
- 亀井明德『福建省古窯址出土陶磁器の研究』都北印刷出版、1995年
- 亀井明德『中国陶磁史の研究』六一書房、2014年
- 嵯振西/杜文『耀州窯瓷』—中国名窯名磁器シリーズ2—嵯振西・杜文著、北村永訳、株式会社二玄社、2004年
- 曾凡「福建順昌大坪林場宋墓」『文物1983-8』、1983年、35-39頁
- 曾凡「福建陶磁の歴史」『中国陶磁全集27 福建陶磁』中国上海人民美術出版社・株式会社美乃美、1983年
- 高橋忠彦「唐宋を中心とした飲茶法の変遷について」『東洋文化研究所紀要第109冊』東京大学東洋文化研究所、1989年
- 高橋忠彦「宋詩より見た宋代の茶文化」『東洋文化研究所紀要第115冊』東京大学東洋文化研究所、1991年
- 田中克子「「博多」にもたらされた中国陶磁器—国内消費地との比較材料として—」『貿易陶磁器と東アジアの物流』平泉・博多・中国、藪敏裕・森達也・徳留大輔編集、岩手大学平泉文化研究センター、2019年、51-78頁
- 徳留大輔、平原英俊、桑静、田上勇一郎、栗建安、羊澤林、沈岳明、會澤純雄「ポータブル複合X線分析による中世前半期の中国産陶磁器の産地推定に関する研究：福建・浙江産陶磁器の研究を事例に」『東洋陶磁』四十八号、東洋陶磁学会、2018年、75-92頁
- 徳留大輔「所謂「珠光茶碗」に関する一考察—櫛描文青磁を中心に—」『出光美術館研究紀要第二十八号、出光美術館、2023年、163-191頁
- 中野徹「宋代陶磁の文様」『世界陶磁全集12 宋代』小学館、1977年、297-313頁
- 中野徹 編、小川忠博 写真『展開写真による中国の文様』平凡社、1985
- 橋本素子・三笠景子編著『茶の湯の歴史を問い直す—創られた伝説から真実へ』筑摩書房、2022年
- 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2019年、9-150頁
- 水上和則「窯道具から見た龍泉窯櫛描紋青瓷碗の位置づけ」『専修人文論集84号』専修大学学会、2009年、315-351頁
- 森達也「福建の陶磁器と窯址—日本との関係から—」『東アジアの海とシルクロードの拠点福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—』海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会、2008年
- 森達也『中国青瓷の研究—編年と流通—』汲古書院、2015年
- 森達也「大陸と列島をつなぐ陶磁器流通ルートの様相—11～12世紀を中心に—」『貿易陶磁器と東アジアの物流』平泉・博多・中国、藪敏裕・森達也・徳留大輔編集、岩手大学平泉文化研究センター、2019年、79-110頁
- 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』四、1978年、1-26頁
- 山本信夫『大宰府条坊跡XV』—陶磁器分類編—大宰府市の文化財 第49集 大宰府市教育委員会、2000年
- 李輝柄「福建同安窯調査記略」『文物』1974年11期、文物出版社、1974年

故宮博物院・福建省文物管理委員会「調査南古代窯址小記」『文物参考資料』1957年9期 文物出版社、1957年  
浙江省文物考古研究所・龍泉青瓷博物館編、『龍泉金村窯跡群2013～2014年調査試掘報告』文物出版社、2019年

#### 図8引用文献

南海沈船：『—中国・南海沈船文物を中心とする—はるかなる陶磁の海路展』田辺昭三監修 朝日新聞社1993、30頁をトレース、模式図化  
博多遺跡『—中国・南海沈船文物を中心とする—はるかなる陶磁の海路展』田辺昭三監修 朝日新聞社1993、70頁74右をトレース、模式図化  
左京八条三坊七町：『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所1982 SD24出土品を実測、模式図化  
大宰府15)：『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会2000、38頁、Fig13のI-3a、I-4b、を下にトレース、模式図化  
博多16-SK749：『博多16—博多遺跡群第37次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第244集 福岡市教育委員会1991、129頁Fig.263を転載

#### 図14・16引用文献

博多港湾線第1次調査-SE39-1063：『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告I 博多』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第183集、福岡市教育委員会、1988年、24頁、Fig.32  
港湾線第2次-683号土壌(木棺墓)16：『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅱ) 博多』福岡市教育委

員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集、1988年、134頁205  
港湾線第2次-649号土壌11：(同)127頁195  
原遺跡-SR062-260：『原遺跡14』—第26次調査—福岡市埋蔵文化財調査報告書第1167集、福岡市教育委員会、2012年、46頁、第37図  
高速鉄道IV-F区2・11・12：『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財報告VI』—高速鉄道関係調査(3)—福岡市埋蔵文化財調査報告書第156集、福岡市教育委員会1987年、90頁Fig.74

#### 参考図書

『近年発見の窯址出土中国陶磁展』出光美術館、1982年  
『唐物茶碗』淡交社、2021年  
『世界陶磁全集12 宋代』小学館、1977年  
『中国陶磁全集27 福建陶磁』中国上海人民美術出版社・株式会社美乃美、1983年  
『中国陶磁通史』中国珪酸塩学会、1991年  
『東アジアの海とシルクロードの拠点福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—』海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会、2008年  
『日本出土の中国陶磁』平凡社版中国の陶磁12、長谷部楽爾・今井敦編、平凡社、1995年  
『日本人と茶—その歴史・その美意識』京都国立博物館、2002年  
『上林湖越窯』古陶磁学術研究基金会叢書 慈溪市博物館・謝純竜編、科学出版社、2002年  
『龍泉金村窯跡群2013～2014年調査試掘報告』浙江省文物考古研究所・龍泉青瓷博物館編、文物出版社、2019年

表1 出土地点一覧表

器種	分類	器形	時期	出土地点	遺構	掲載番号
青磁	D ?	椀		左 4214	SK2642	278
青磁	D ?	椀		左 5309 ①	SE08	未
青磁	D ?	椀		左 6313	烏丸線No. 58	
青磁	D	椀 or 鉢	5B	右 3101	SD100	73
青磁	D	椀 or 鉢		上京遺跡	土坑 268	26-21
青磁	D	椀	6A	左 7312	土坑 55	73・74
青磁	D	椀	△ 6A	左 837	SD24	278・288・289
青磁	D	椀	6AB	左 447	井戸 172	137
青磁	D	椀	△ 6AB	左 8402	SE265	130
青磁	D	椀		左 8402	SE155	未
青磁	D	椀		左 9310	土坑 405	457
青磁	D	椀		円勝寺①	溝 900	275
青磁	D	椀		左 8316	近世土坑 (SK5)	16・未
青磁	D	椀	6B	左 8402	SK150	141
青磁	D	椀		左 9308	土坑 71	26
青磁	D	椀		左 4304	土坑 4	159
青磁	D	皿	6A	左 3210	溝 1315	209
青磁	D	皿	6A	左 6305	土坑 2345	38-61・62
青磁	D	皿	6A	右 3104	SD100	85
青磁	D	皿	△ 6A	左 837	SD24	263～271・274・276
青磁	D	皿	6B	右 636	SB79	637
青磁	D	皿	6B	左 5211	地下室 2123	144
青磁	D	皿	6B	白河街区	土器溝 329	111・112
青磁	D	皿		左 4304	土坑 9 (室町)	210
青磁	D	皿		上京遺跡	土取穴 211	82
青磁	D	皿	6B	左 5204	井戸 57	85
青磁	D	皿	6B	左 4312	SK0822	140
青磁	D	皿	6B	左 7310	SD786	55～57
青磁	D	皿	6C	円勝寺②	溝 2220B 東護岸	216
青磁	D	皿	6C	左 5210	SK751	77～82
青磁	D	皿		左 5309 ②	土坑 505	116
青磁	D	皿	6C	左 5309 ②	地下式倉庫 370	293
青磁	D	皿	6C	左 4214	SK2276	483
青磁	D	皿	△ 7A	左 5316	土壙墓 157	218
青磁	D	皿	△ 7A	法住寺	井戸 4-250	311～313
青磁	D	皿		左 9308	井戸 223	32
青磁	D	皿		左 617	土坑 4	1・2
青磁	D	皿		左 7211	SD1239	293～297
青磁	D	皿		左 9310	池 1121	450・452
青磁	D	皿		左 9310	整地層 1	453
青磁	D	皿		左 9310	土坑 576	454
青磁	D	皿		左 9310	土坑 33	455
青磁	D	皿		左 9310	井戸 163	449
青磁	D	皿		左 9310	井戸 164	451
青磁	R	椀	△ 6A	左 837	SD24	279～287・290
青磁	R	椀	6A	左 4312	SK0387	118
青磁	R	椀	6B	左 4214	SX2700	413・414
青磁	R	椀	6B	左 5211	地下室 2123	142・143
青磁	R	椀	6BC	円勝寺①	土坑 616	383
青磁	R	椀		左 8316	近世土坑	14・15
青磁	R	椀	△ 7A	法住寺	井戸 4-250	316・319
青磁	R	椀		左 5309 ②	土坑 505	118
青磁	R	椀		左 9310	整地層 2	459
青磁	R	椀	△ 6BC	左 6209	井戸 2961	489
青磁	R	椀	6BC	左 7211	SD1234	290
青磁	R	椀	6B	左 4214	SX2700	412
青磁	R	椀	6B	左 7310	SD786	59
青磁	R	椀	△ 7A	左 5316	土壙墓 157	217
青磁	R	椀		左 8308	SF290	193
青磁	R	椀		左 8316	近世土坑	未
青磁	R	椀		左 9310	整地層 1	456



器種	分類	器形	時期	出土地点	遺構	掲載番号
青磁	R	椀 (小椀)	6A	右 3103	SD222/225	2-45、2-40
青磁	R	椀	6B	左 7310	SD786	58
青磁	R	椀	△ 6A	左 5309 ②	SK450	134
青磁	R	椀		常盤		28 ~ 30
青磁	R	椀		上京	土坑 268	26-19
青磁	R	椀		大藪	溝 2-C	67
青磁	R	椀		左 9216	井戸 394	73
青磁	R	皿	△ 6A	左 837	SD24	272・273
青磁	R	皿	6B	右 616	SG26	605
青磁	R	皿		左 617	土坑 4	3・4
青磁	R	皿		左 830405	SK108	482
青磁	R	皿		左 3304	SK27	127
青磁	R	皿		円勝寺②	溝 2220B 東護岸	215
青磁	R	皿	△ 7A	法住寺	井戸 4-250	314・316・319
青磁	R	皿		円勝寺②	溝 5115	438
青磁	R	皿	6B	左 5211	地下室 2123	145
青磁	R	椀 (蓮弁)	6B	円勝寺①	土坑 616	382
青磁	R	椀 (蓮弁)	6B	左 5211	地下室 2123 下層	202・203
青磁	R	椀 (蓮弁)	6BC	左 6209	井戸 2961	488
青磁	R	椀 (蓮弁)	6BC	左 7211	SD1239	290
青磁	R	椀 (蓮弁)	7A	左 5316	土墳墓 157	215・216
青磁	R	椀 (蓮弁)	6C	左 5210	SK751	75・85
青磁	R	椀 (蓮弁)	6Cn	左 6209	土坑 2842	548・549

表 2 引用報告書一覧

出土地点	報告書
左 3210	『平安京左京三条二坊十町 (堀河院) 跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008
左 3304	『平安京左京三条三坊四町跡・烏丸御池遺跡』『京都市内遺跡試掘調査報告令和元年度』京都市文化市民局 2020
左 3307	
左 4104	
左 4214	『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003
左 4304	『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント 文化財調査報告書第 2 集 株式会社ニッセン 株式会社日開調査設計コンサルタント 2007
左 4312	『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006-26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007
左 4407	『平安京左京四条四坊七町跡』—中京区甲屋町の調査— 古代文化調査会 2018
左 5204	『左京五条二坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014
左 5210	未報告 平安京左京五条二坊十町跡 関西文化財調査会 EZT
左 5211	『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017
左 5309 ①	『左京五条三坊 (1)』『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要 (発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981
左 5309 ②	『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008
左 5316	『平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-21 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013
左 6107	『平安京左京六条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-5 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017
左 6209	『平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財 2019

出土地点	報告書
左 6305	『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005
左 6314 (烏丸線 No.61)	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980
左 6313 (烏丸線 No.58)	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980
左 7211	『平安京左京七条二坊十一町跡(東市外町)発掘調査報告書』龍谷ミュージアム建設に伴う発掘調査学校法人龍谷大学 2010
左 7310	平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左 7312	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981
左 830405	『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009
左 8307	『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 6 冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982
左 8308	『平安京左京八条三坊八町跡・東本願寺前古墓群』関西文化財調査会 2020
左 8316	「9 左京八条一坊」『昭和 61 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989
左 8402	『平安京左京八条四坊二町跡・塩小路若山城跡』京都市文化財保護課発掘調査報告 2022-1 京都市文化市民局 2023
左 9216	『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015
左 9308 ①	『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020-7 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021
左 9308 ②	『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸綾小路遺跡』文化財サービス発掘調査報告書第 12 集株式会社文化財サービス 2020
左 9310	『平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
右 3101	平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
右 3103	『平安京右京三条一坊三町(右京職)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002
右 3104	『平安京右京三条一坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005
右 6106	『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002
右 6306	『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002
円勝寺①	『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016
円勝寺②	『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018
法住寺	『京都国立博物館構内発掘調査報告書一法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 23 冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009
白河街区	『白河街区・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2020
上京	『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006
常盤	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006
大藪	『大藪遺跡・下久世構跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022-4 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2023

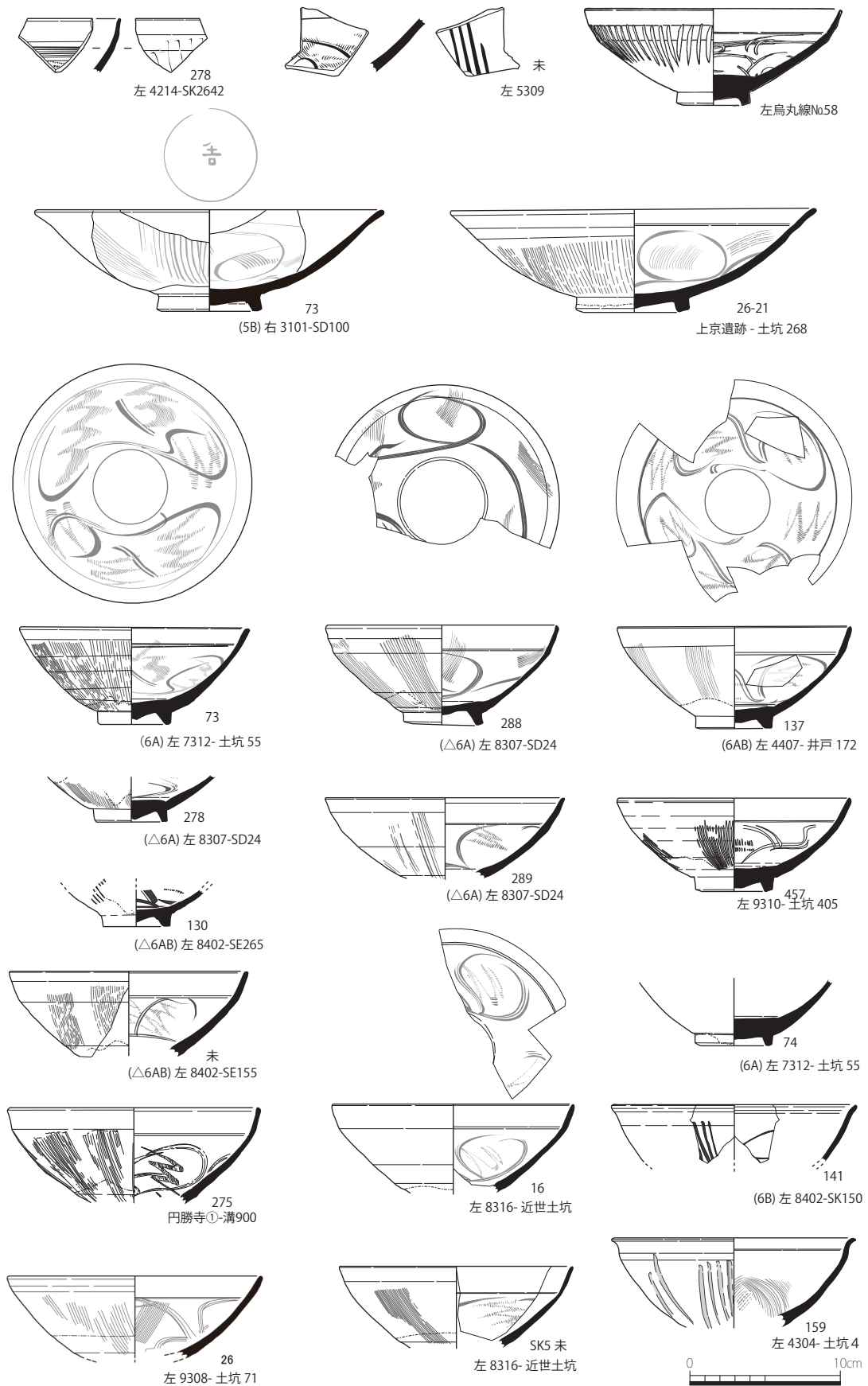


図19 京都出土遺物 (1) 青磁D群 椀



図20 京都出土遺物 (2) 青磁D群 皿



図21 京都出土遺物 (3) 青磁D群 皿

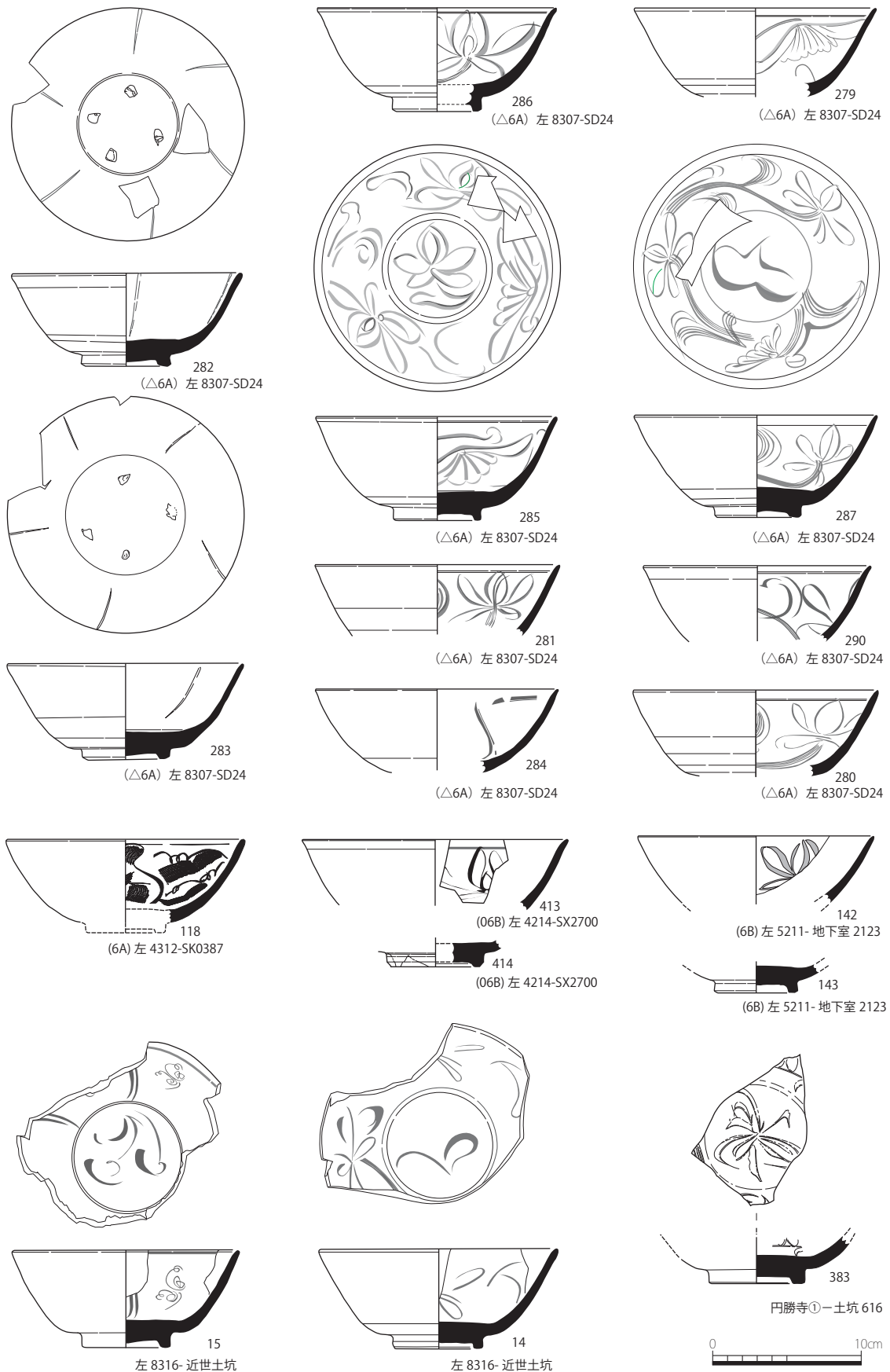


図22 京都出土遺物 (4) 青磁R群 椀

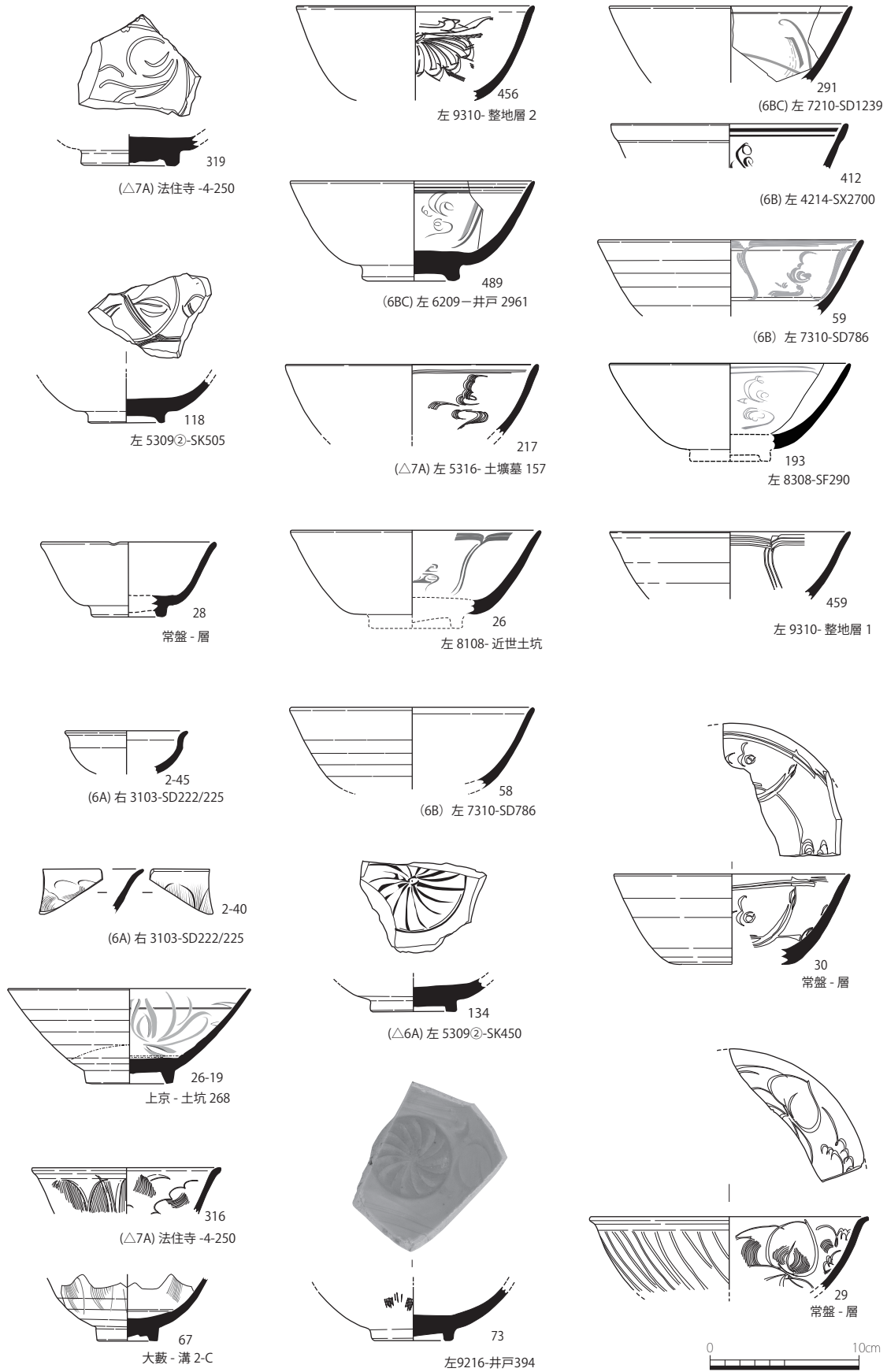


図23 京都出土遺物 (5) 青磁R群 椀

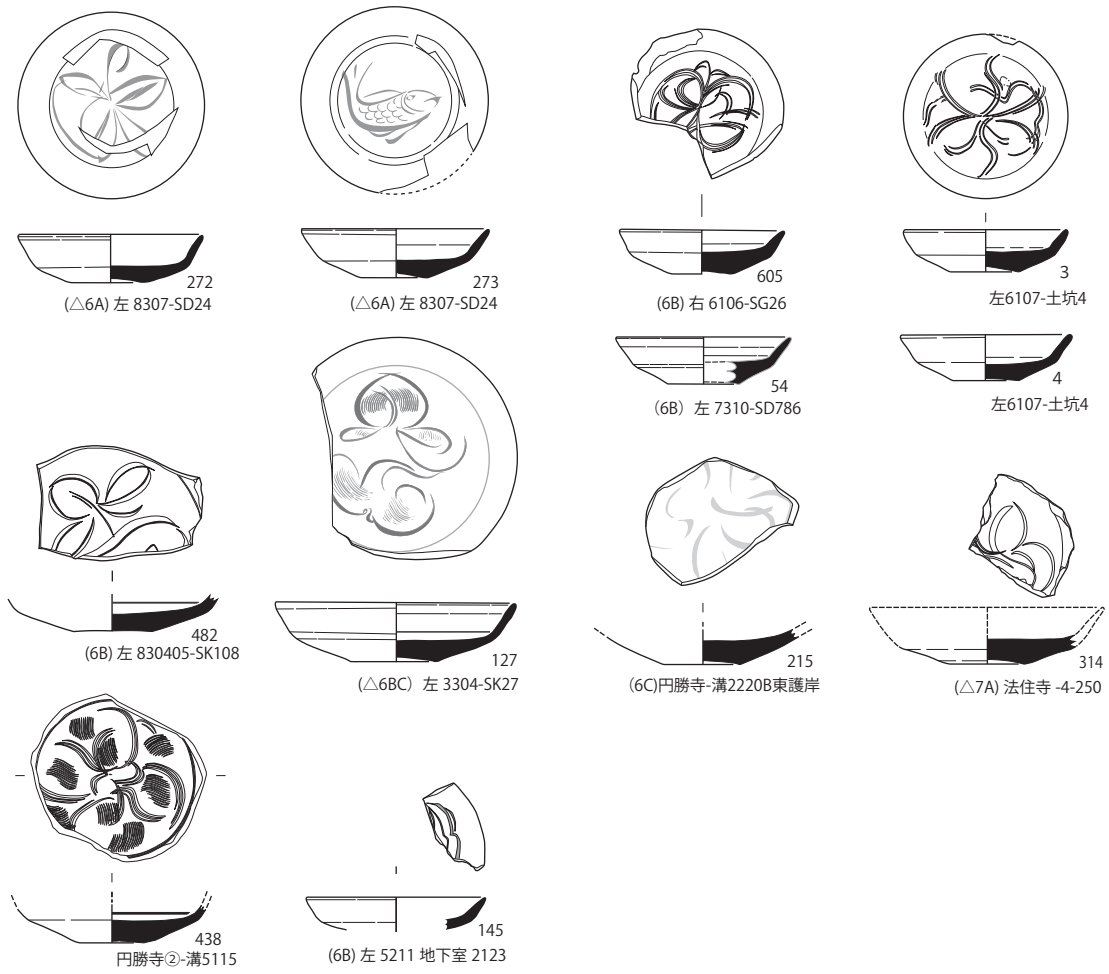


図 11 に使用した蓮弁文青磁

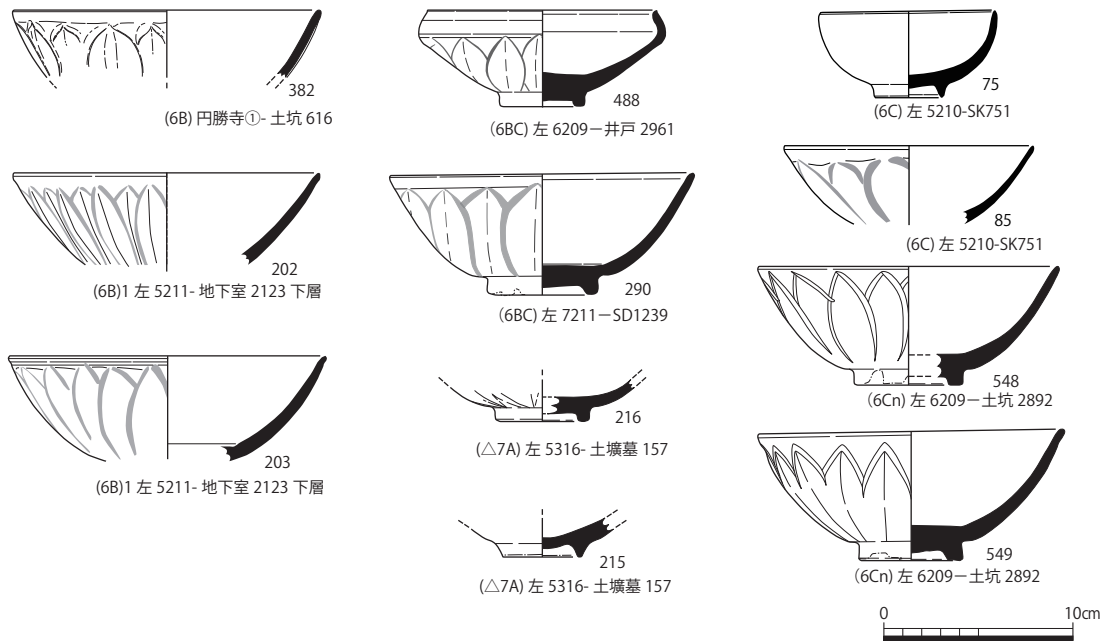


図 24 京都出土遺物 (6) 青磁 R 群 皿・蓮弁文碗



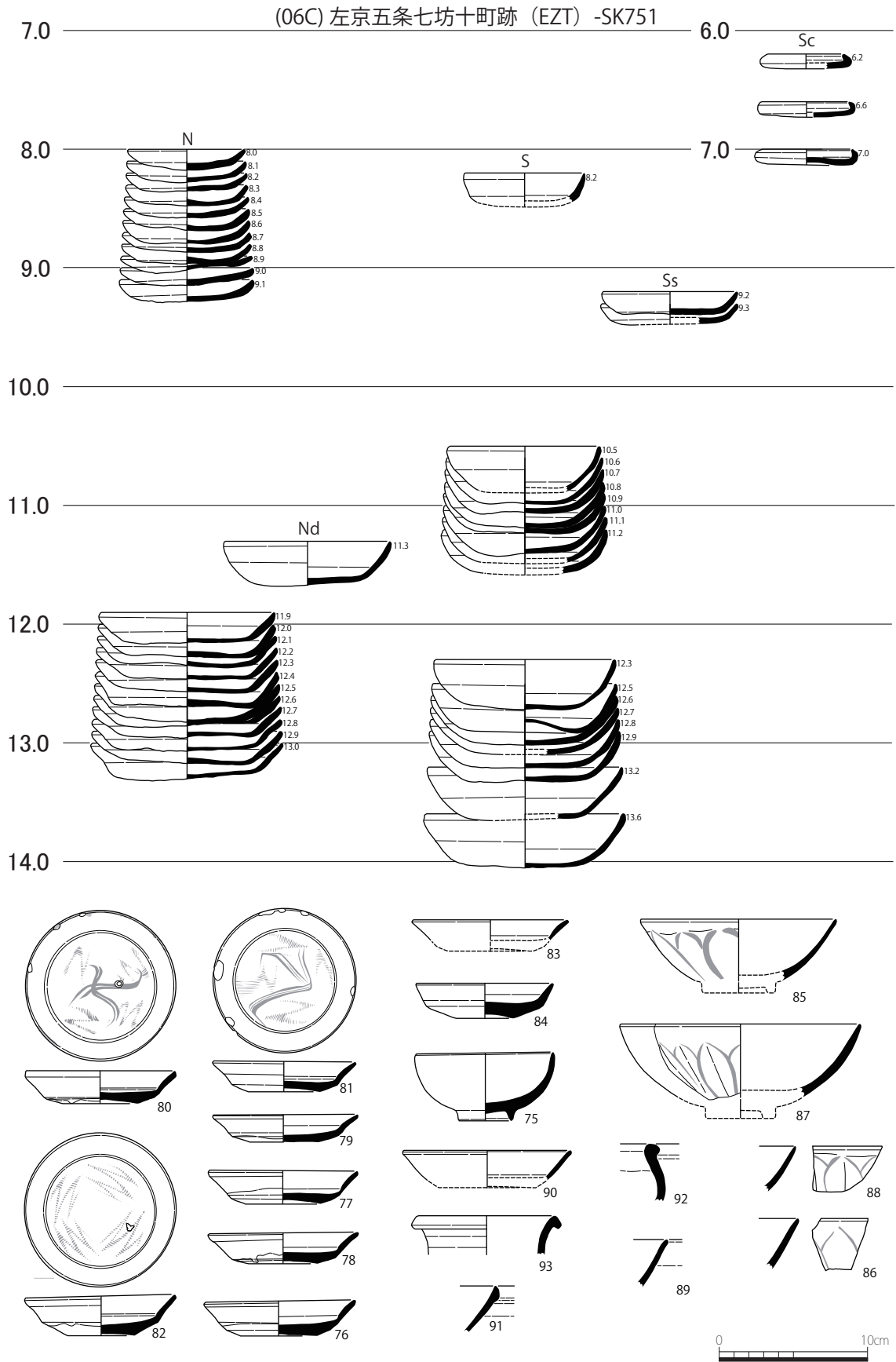
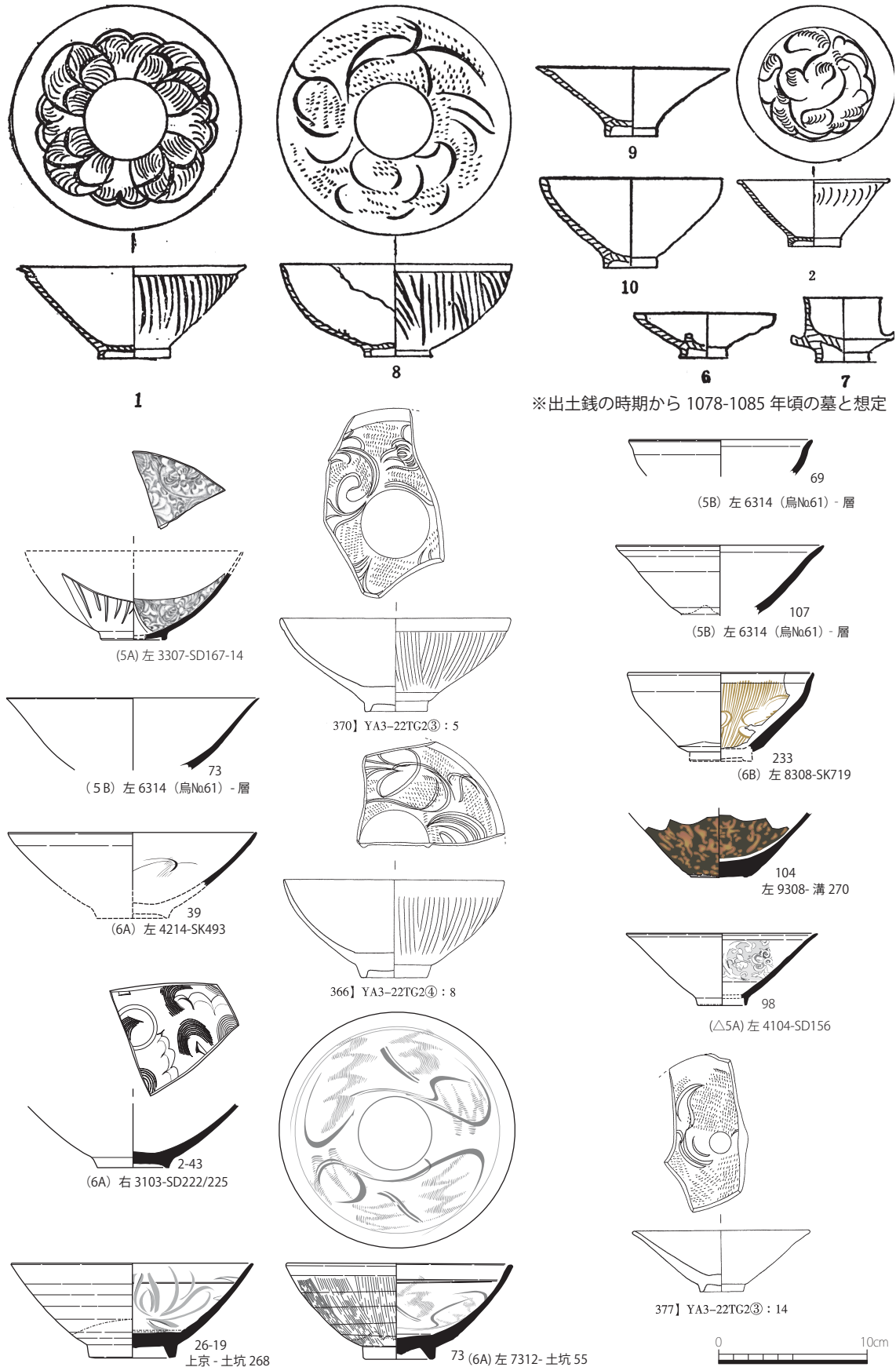


図25 左京五条七坊十町跡SK751出土遺物 (関西文化財調査会2020年調査)

福建省昌平県大坪林場宋墓出土の椀類



※出土銭の時期から 1078-1085 年頃の墓と想定

図 26 福建省昌平県大坪林場古墓出土の蓋類と 12 世紀後葉から 13 世紀出土の斗笠椀（蓋）の大きさ比較